

インフィニット・スト
ラトス 虹の彼方は無
限の成層圏(一時凍結)

タオモン3

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙世紀0093

シヤア・アズナブルを総帥とした、新性ネオ・ジオン軍は地球連邦政府に対し再び戦いを挑んだ。

第二次ネオ・ジオン抗争

地球の重力に魂を縛られ、自己中心的な支配を続ける人類を肅清する為、巨大な隕石を落下させ、地球を寒冷化させる作戦を展開した。

この暴挙に地球連邦軍は一年戦争の英雄アムロ・レイ、ブライト・ノア率いるロンド・ベル隊を出動。しかし、小惑星5thルナを止めることが出来ず、地球連邦政府本拠地

のラサに落下してしまう。

そして、かつてネオ・ジオン本拠地アクシズを落とし、完全に地球を寒冷化させるべく動き出した。

元ジオン公国軍のユウヤ・キサラギ少佐もネオ・ジオンの一兵として、彼の唯一の家族、元カラバ所属ユウキ・キサラギ技術大尉——通称ホワイト・ユニコーンも愛機Ζガンダム三号機でアクシズ落下阻止作戦に参戦していた。

地球に落下するアクシズを押し返した光——サイコ・フレームの輝きの中、二人は旧暦の世界に飛ばされてしまった。

UC時代ガンダムメインフィニット・ストラトスとのクロス作品です。

目次

設定集

IS設定

1

キャラ設定

7

本編

第一話

最後の戦争

11

第二話

星空の夜に

27

第三話

天災との邂逅

38

第四話

戸惑い

49

第五話

専用IS完成

62

第六話

15対1

75

第七話

驚愕の再会

90

第八話

親友と戦友

106

第九話

再開の盃

115

第十話

実機試験開始

129

第十一話

試験一戦目

ユウヤVS

ガト

試験二戦目

ユウキVS

第十二話

試験三戦目

一夏VS麻

ガト

168

第十三話

試験三戦目

一夏VS麻

耶?

184

設定集

IS設定

ネオサイコ・ドーガ

IS開発者、篠ノ之東と妹のユウキが造り上げたISとMSの混合世代型IS。

元になった《サイコ・ドーガ》にお互いの用いるすべてをつぎ込んだ為、規格外に大型化してしまったIS。機体活動に大幅なエネルギーを消費するため、シールドバリアーは装甲が一定以上のダメージを受けないと起動しないようになっていた。

武装もファンネルI/O機、メガ・ビームライフル、ビーム・アックス、ビームサーベールとシンプルなもの。ファンネルはバインダーに戻すことで内部エネルギーを回復する。

装甲にガンダリウム合金を採用しているため、並大抵な兵器では傷を付けることができない。サイコ・フレーム、ムーバブルフレームなども導入して反応性、追従性を底上げしているオーバースペックすぎる性能がある。全身装甲型。

待機時 ネオ・ジオンの軍旗を象ったネックレス

武装 ハイ・ビームライフル×1

専用シールド×1（ビーム・アックス収納可能）

ビーム・アックス×2

ビームサーベル×2（スカートアーマー内に収納）

隠し腕×2

カラーリング ワインレッド

ナイチンゲールとシナンジュ（装備）を混ぜてサイコミュ試験型ギラ・ドーガで割った感じですよ。

アサルト・ゼータ

篠ノ之束とユウキが造り上げた混合世代IS二号機でユウキ専用機。

元になったユウヤのISと比べZガンダムの面影を残しつつISに昇華させた。

人間サイズで可変機能は流石に無理があつた為、止む無くオミット。

代わりに高速戦闘ユニット「アサルトデیفエンサー」を装備。

ユウヤのIS同様、サイコ・フレーム、ムールブルフレームを採用してあるため機体ス

ペックは高水準。

ユウキの卓越した操縦技術を持つてすれば《ネオサイコ・ドーガ》に劣ることはない。

ユウキは「アサルトデیفエンサー」の他にも専用ユニットを作ろうとしている。

《ネオサイコ・ドーガ》と同じ全身装甲。そしてシールドエネルギーを稼働にまわしている。

待機時 ユニコーンの形をしたネックレス

武装 ビームライフル×1

ハイパーバズーカ×2

ビーム・メガ・ランチャー×1

ビームサーベル×2

シールド×1

アサルトデیفエンサー

アサルト・ゼータ専用的高速戦闘ユニット。

大気圏内、外での飛行、突入能力を上げることができるバックパックユニット。

背面にISを目的地に運搬することができるグリップがある。

2連装ビーム砲

マイクロ・ミサイル

カラーリング 白と青

ZをH i l lの色にしてリゼルのユニットをくつつけた感じです。

白零姫

束が一夏のための用意していたものにMSの材質を足し完成させたIS。原作IS《紅椿》の展開装甲、ビット。《白式》の第二形体・雪羅の多機能付武装腕。《暮桜》の近接刀雪片の発展型「雪片惨型」などを装備している。

近、中、遠すべての距離と攻撃、防御、機動とその状況に即時対応が可能。第四世代型でなく混合世代型ISと名称も変更されている。

一夏には言っていないがまだ隠された機能がある……らしい。
ユウヤたちと違い全身装甲ではない。

待機時 原作同様にガントレット

武装 近接刀雪片惨型×1

多機能付武装腕・麗月

スラスター兼ビット×2

カラーリングは白

白式と紅椿を足したようなもの

シユヴァアルツェア・シユネーシユツルム（黒い雪嵐）

元クロエが使っていた第二世代 I S 《シュヴルツェア・シュネー》の装甲を M S のも
のに変更、改修を施した I S 。

ビーム武装はなく、実弾武装だけと他の 3 機と比べ見劣るものはあるが、機体性能は
既存の I S を超えている。

第二世代機をベースにしてあるため、武装は豊富で戦況に応じた装備を選べるこ
が可能。

装備を運用するため鈍重な姿になってしまったが機動力はあり一撃離脱型の《シ
ュアルツェア・シュネー》の特性を生かした I S となっている。

一夏同様に全身装甲でない。

待機時 シルバーのリング

武装 3 連装 M L R S × 2

25 m m 6 連砲身ガトリング砲 × 1

30 m m 滑走砲 × 1

腕部 3 連ガトリングガン × 2

アサルトライフル

ショットガン

M M P 80 マシンガン

ジャイアント・バズ

超大型ヒート・サーベル×1など

カラーリングは黒

ぶつちやけドライセンみたいな感じですよ
WWW

キャラ設定

ユウヤ・キサラギ 性別 男

(IS世界時) 20歳 (UC0093時は33歳)

身長177cm

体重68キロ

容姿、トータルイクリップスのユウヤ・ブリッジスの感じ。

本作の主人公。UC0093のシアアの反乱の際に、落下するアクシズを止めたサイコ・フレームの光に巻き込まれ、ISの世界に飛ばされてしまう。戦闘型のニュータイプ。

一年戦争時はジオン軍に所属し、ルウム戦役、地球降下作戦、オデッサ防衛線、ア・バオア・クー防衛戦などに参加し武功を上げた。(当時の階級は大尉)

終戦後はアクシズに亡命。デラーズ紛争、グリプス戦役、第一次ネオ・ジオン抗争の後にシアア率いる新生ネオ・ジオンに参入(階級は少佐)

ネオ・ジオンサイコミュ搭載プロトタイプMS(サイコ・ドーガ)を受諾しアクシズ防衛戦に赴くも、双子の妹——ユウキのZガンダム三号機と対峙した。

人にやさしく自分に厳しい性格だが、敵対する者は容赦なく排除する。

IS特性A（本気時はS）

ユウキ・キサラギ 性別 女

（IS世界時）20歳（UC0093時は33歳）

身長170cm

体重43キロ

容姿、トータル・イクリプスの唯依姫の感じ（訓練生時代の髪型）

ユウヤの双子の妹。

ユウヤ同様、落下するアクシズを止めたサイコ・フレームの光に巻き込まれIS世界に飛ばされてしまう。感応型ニュータイプ（ユウヤより素質は上）

本来は整備士になる為に入隊したが、高い操縦技術を買われ止む無くMSパイロットになってしまう。

空間認知能力は兄を上回るものの鋭い感性ゆえに臆することが多々あり全力を發揮することができないでいた。

一年戦争時は兄ユウヤと戦場を渡り歩き、ともにアクシズに亡命（階級は小尉）

UC0083年のデラーズ紛争終結時にアクシズを脱し、アナハイムのMS開発テス

トパイロットになり反連邦組織エウーゴの支援組織カラバに参入した。

グリプス戦役終結後は開発パイロットに戻り、後にロンド・ベルに入隊。第二次ネオ・ジオン戦争時はアムロ・レイのレガンダムの開発にも携わった。

余談だがアムロとは親しい関係だったとか。

IS 適正 A+

織斑一夏 性別 女

15歳

身長153cm

本作のヒロイン

IS世界大会優勝者、織斑千冬の妹。

物静かで大人しい性格。

姉ほど能力はなく、周りから「出来損ない」と称されているが本人はあまり気にしていない。本作より三年前のある事件をきっかけに束と行動を共にしている。

幼いころより宇宙に興味を抱きいつかISを使つて飛ぶことを夢見ている。

MSやユウキと対面した時に「危険」「悪意」というものを感じ取る感性を持っている。

I S 特性 B

クロエ 性別 女

16歳

身長160cm

本作ヒロイン2

原作と違い専用機が《黒鍵》でなく、設定自体がオリジナルになったキャラクターの一人。

ある組織によって生み出された遺伝子強化試験体の一体。

身体能力を原作より大幅強化。UC世界の強化人間に近い存在になっている。

ISとの適正もA+と優れている。

本作の二年前、ある組織の足取りを追っていた束を拘束するために差し向けられるが逆に救われ、それ以来、行動を共にしている。料理は苦手。

彼女も実験の影響からか——もしくはもって生まれたものなのか——ユウヤをラボまで運ぶ最中に「温かいなにか」を感じ取れていた。

本編

第一話 最後の戦争

ユウヤサイド

『少佐、シヤア総帥が出撃します。少佐の隊は総帥の護衛と敵MSの排除をお願いします』

「了解した。しかし、総帥に護衛は必要ないかと思うが、ナナイ大尉」

『そうかもしれないませんが、もしもの時のためにお願ひします少佐』

それだけ言うと、一方的に通信を切られた。

相変わらず、シヤア以外は冷たい女だ。

「各機はレウルーラの護衛を継続。総帥には俺が付く、いいな？」

『了解!!』

部隊の隊員にそう命令し、俺は乗機サイコミ試験型ギラ・ドーガ——長いからサイコ・ドーガと呼んでいる——のオールビュウモニターに旗艦レウルーラを正面に入れた。MSデッキから赤い機体——シヤアの乗機サザビーが発艦した。

フットペダルを踏込み、メインスラスターを始動。サザビーの後を追う。

「シヤア、俺はナナイに嫌われているのか?」

『なんのことだ?』

「あなたの護衛をしろつてさ」

『……ナナイめ、余計なことを』

愚痴るようなシヤアの呟きに、俺は肩を竦めた。

前方から無数のミサイルが飛来してくる。

ロンド・ベルの艦隊から放たれた、核ミサイルがその中に混ざっていると瞬時に感じとれた。

「ファンネル!」

サイコ・ドーガの両肩部にある、筒状の突起物——ファンネルを二機射出。

軌道イメージをそのままファンネルに伝達した。

「そこだつ!」

小型のバーニアを輝かせ、俊敏な機動で目標物に接近、内蔵されたビーム砲を噴く。

一際大きな爆発光が、オールビュースターに映った。

核ミサイルをピンポイントで撃墜したからだ。

「つーまどくる?!」

爆風の中から現れたミサイルはファンネルを振り切り、アクシズのノズル付近に命中

した。

時間差で仕掛けてきたか。

「流石、ブライトだ！」

敵の指揮官に称賛しながら残りの核ミサイルを撃ち落とす。

瞬間、気配を感じサイコ・ドーガをその場から急加速を促した。

シヤアのサザビーが後方から一気に追い越していく。

あいつも感じたのか。

「居たっ！」

モニターに二つの機影を捉えた。

照明データがない機体——アムロ・レイの新型ガンダム。

もう一つは白と紫の可変機——MSZ-06-3——Zガンダム三号機。

この感じ……搭乗者はユウキか。

「……そうか。お前も参戦してきたのか」

半球状の操縦桿に力が入る。

今更、後には引けない。お前とは敵同士。この作戦のためなら俺は、家族でも躊躇な

く引き金を引くぞ。

友との約束ため！あいつの様な者を生ませないために！

俺は……お前を討つ!!

「ユウキイイイイツ!!」

Zガンダムに標準を付け、サイコ・ドーガのビームライフル数発を行先めがけて放った。

当てるのが目的ではない、機動を妨害するための牽制射撃だ。Zガンダムはビームを避け、MS形体に変形した。

「いけよーファンネルツ!!」

残り四機の内、二機のファンネルをZガンダムに突撃させる。

Zガンダムは回避機動をしながらもビームライフルとバルカンの多様でファンネルを易々と撃墜した。

「それでこそ……だがッ!」

右手のライフルを捨て、腰にマウントしてあるビーム・ソード・アックスを装備。

スラストを全開にしてZガンダムとの距離を一気に詰め、ビーム・ソード・アックスの斬撃を見舞う。

ファンネルに気を取られる中を狙ったが、寸前ところでZガンダムはライフルを楯に回避した。

だが、ライフルを奪うことはできた。

その時、

『……………兄さんなの？』

「……………ユウキ」

オープン回線でユウキの声が聞こえた。

ユウキサイド

僕の名前はユウキ。ユウキ・キサラギ。

地球連邦宇宙軍外郭部隊ロンド・ベルに所属の技術大尉。

僕は今、小惑星アクシズの落下阻止のために愛機Zガンダム三号機でアクシズに接近していた。

その時、殺気を感じて反射的に回避行動をとった。

黄色のビーム光が目の前を横切った。

ZガンダムをMS形体に変形させた。

閃光が飛来してきた方向からブラックとワインレッドのツートンの機体が接近してきた。ネオ・ジオンのMSギラ・ドーガに類似したそのシルエット。肩部にファンネルを装備しているから、さきほどアムロ大尉が撃墜したニュータイプ機の同型機なの？

そう考察していると案の定、ファンネルが二機向かってきた。

僕のZガンダム三号機は、5年前のグリプス戦役で開発された機体だが、最新のマグネット・コーティングとコックピットシート、バーニアノズルに換装をしてある。さらにコックピットの周りにサイコ・フレームを内蔵。アムロ大尉のガンダムまではいかないが機体ポテンシャルは相手より上のはず。

ファンネルのビームを回避してからライフルで一つ、回り込もうとしたもう一機を頭部バルカンで撃破した。

「っ!？」

殺気を感じて機体を反転した瞬間、モニターにビームの斧を振りかぶったギラ・ドゥガもどきが目前に迫っていた。

回避が間に合わない!

僕は咄嗟にライフルを楯にして斬撃を危うくしのいだ。

さっきのニュータイプ機とMAよりも鋭いプレッシャーを放ってくる。

間違いなく兄さんが乗っている。そう感じた。

僕は相手にオーブン回線で呼びかけた。

「……………兄さんなの?」

『……………ユウキ』

その声は僕の知っている兄さんのものだった。

だからなのか僕は叫ばずにいられなかった。

「兄さん！何やってるんだよ！こんなことして何になるんだよ!!」

『……………』

「なにか言つてよ!!」

『……………俺は……………今の世界を潰す。邪魔をするなツ!!』

強いプレッシャーを放ちながら兄さんの機体がビーム・アックスで接近戦を仕掛けてくる。

球体型操縦桿を素早く動かして、ビームサーベルを右手に持たせ斬撃を受け止めた。

なんでなんだ兄さん。

ビーム同士がぶつかり激しい閃光の中で僕は思わずにいられなかった。

「こんなことしてもみんなが喜ぶとも思っているの? いい加減に目を覚ましてよ!! 彼女たちが、みんなが願った世界はこんなことをしてまでも、願った世界じゃない!!」

『お前に何が分かる? 腐った連邦に属すお前に、あいつ等の痛みや悲しみ、願いが分かるものか!!』

「分かつてもらえないから壊すの? 今の世界を?」

『違う! 宇宙に人々を上げること、全人類が地球の重力から離れ、ニュータイプになればそんなことは起きない。これは救済だ、ユウキ!』

「そんなの復讐のまちがいだろ!!偉そうに言うな!!」

『……………ッ!』

アムロ大尉のガンダムが兄さんと来た赤いMS——シャアと戦闘しながらアクシズに取りついた。

こんなことをしている内にもアクシズは徐々に地球へ落下していく。

いまは兄さんよりもアクシズを先になんとかしないといけない。

熱くんなる頭を冷やして、操縦桿を押し込んだ。

「このくそっ!」

兄さんの機体を押し返し、Zガンダムを素早くウェーブライダー形態に変形させた。

『逃がすか!ファンネル!!』

兄さんの機体からファンネルがさらに二機射出された。

ファンネルはしつこく追隨して、ビームを斉射してくるが機動性が上がったZガンダムに当てることはできない。一気にメインスラスターを全開にしてファンネルと兄さんを振り切った。

ユウヤサイド

「……………なんて様だ」

笑えてくる。

ユウキのZガンダムはサイコ・ドーガより性能は上、おまけに殺す覚悟を決めたはずなのに、自分でもわかるほど踏込が甘い。最後のファンネルを感情に任せて使い切ってしまった。

不甲斐なさに拳を叩き付けた。

「くそがああ!!」

サイコ・ドーガをアクシズに向かわせる。

何が何でもこの作戦だけは成功させなくてはいけない。

——いい加減目路覚ましてよ!!

うるさい。

——彼女たちが願った世界はこんなことをしてまでも願った世界じゃない!!

うるさい、黙れ。

——そんなの復讐の間違いだろ!!

スラストーを全開にしてアクシズに、いやZガンダムを追う。

残る武装はシールドのビーム砲とビーム・ソード・アックス2本。

心もとないが必ず、仕留める。

「なんだよこれ……」

しかし、モニターに映る光景に唾然とした。目前でアクシズが中心から2つに割れたからだ。

「ロンド・ベル……ユウキ……」

強張った体の力が抜けていった。

作戦が失敗しての消失感か、家族を手に掛けずに済んだことの安堵なのか分からない。

「だが、あれでは……」

コンピュータで計算してみると後方の半分が地球へ落下することが確定した。分断する爆発が大きすぎたのだ。

これで……作戦は完了する。

なのに、なぜこうも胸が苦しい？ 頭の中が気持ち悪い？

俺は……本当は……

「あれは……!!」

落下していくアクシズの先端でMSの光が2つ、押し返そうと強い輝きを放っている。

まさか、ユウキお前はそこにいるのか？

「は、ははは……」

無茶だ。あれだけの質量の小惑星をたかが2機のMSでどうとかなるものじゃない。ただの自殺行為だ。

コックピットに警報が鳴り響く。

いつの間にか、機体がアクシズの表面に来ていた。

「くそが……分かってるんだよ、そんなことはさ」

復讐か、そうかもしれない。ただそれでも俺は世界を変えたいと思ったんだよ、ユウキ。そうじゃないと、あいつらが報われないだろう。

サイコ・ドーガを2機がいる先端に向かわせた。

武装もすべて捨てた。オーバーロードで誘爆するなんて御免だ。

しかし、今から往く場所では大して変りないか。

先端には案の定、Zガンダムとアムロのガンダムがそこには居た。

それどころかロンド・ベルのジェガン、連邦宇宙軍のジムⅢ、同軍のギラ・ドーガまでものが次々と取りついていった。

その中、サイコ・ドーガをZガンダムの隣に寄せ、両腕をアクシズにぶつけ、スラスターを全開にした。

『兄さん?!』

「やるぞ、ユウキ。俺たちの力で！」

『うん、そうだね!』

何機は摩擦熱で機体がオーバードを起こしながら爆散していく。既に熱を帯び始めた機体が悲鳴を上げるようにコックピットが上下左右と激しく揺れる。

ディスプレイに危険を知らせる表示とアラートが鳴りつばなしだ。

高度も限界に近い。だが諦めるか! 諦めてたまるか!!

「うおおおおおおお………っ?!」

その時、アムロのガンダムとユウキのZガンダムから光が溢れ出た。

そしてサイコ・ドーガからも同じように光が出てくる。

これはサイコ・フレーションなのか?

「人の………意思の力………」

そうか………これが俺の求めたものなんだ。

光りに包まれ、意識が薄れていく。なのに、不思議と恐怖は感じない。温かく、安心できる。この温もりが人の可能性なのか。

「いまいくよ………みんな………」

結局の所、俺は死に場所探していたのかもかもしれない。

この温もりの中で死んでいくなら悔いはない。

そう思い、俺は意識を手放した。

懐かしい声を聴いた気がしたが、もう分からなかった。

ユウキサイド

「退いて!!」

アクシズに着いた僕はメインノズルを破壊する為、アクシズの後方部に向かってZガンダムを駆けている。途中、防衛のギラ・ドーガをサーベル、バルカンで腕や足、頭部、武装を重点的に狙い無力化する。

パイロットをなるべく殺したくない。

それは僕の弱さかもしれないけど、これが僕のやり方だ。

「あれは……ラー・カイラム? 上陸したの?!」

ロンド・ベルの旗艦ラー・カイラムがゆっくりとアクシズから離脱していく。

ブライト艦長たちがアクシズの爆破準備が完了したと感じた僕は、Zガンダムをウエーブライダーに変形して、アクシズから急ぎ離脱した。

瞬間、アクシズが中心から大爆発、二つに割れた。

衝撃の余波でコックピットが激しく揺すられる。

木の葉のように舞う機体を姿勢制御スラスターで安定させる。

「やった………っ!!」

いや、だめだ。

二つにされたアクシズの後部が爆発でブレーキが掛かって、地球の重力に引かれてい
る。

ダメだったの？

落胆していると一筋の光が後部アクシズの先端に伸びていく。

望遠モードで確認すると、それはアムロ大尉のレガンダムだった。

まさか、アクシズの軌道を変えるの？

「無謀……だけど……」

やらないよりはマシだ！

僕はアムロ大尉の後を追いかけた。

レガンダムはアクシズに両腕部で持ち上げるように押し付け、バーニアを極限までに
噴かしている。

ウェーブライダーからMSに変形して同じように両腕部をアクシズに押し付けた。

「アムロ大尉、手伝います！」

『ユウキ!?君まで付き合う必要はない!退くんぞ!』

「そういうけど……他はそう思っていないよ」

それを裏付けるようにジェガンやジムⅢ、敵のギラ・ドーガまでもアクシズに取りつ

いてくる。

その中にグレーとワインレッドのサイコミユ搭載のギラ・ドーガ——兄さんの機体もあつた。

「兄さん?!」

僕は驚いた。兄さんはZガンダム横に機体を付けた。

『やるぞ。ユウキ。俺たちの手で!』

通信を聞いて僕は笑った。

「うん、そうだね!」

嬉しかった。また兄さんの隣に立つことができる。

昔みたいに二人の力で……いくよ、Zガンダム! 兄さんと共に!!

しかし、十数機のMSバーニア出力をもつてもアクシズは、徐々に地球に落下していく。

数機が摩擦熱とオーバードで爆散していった。

「あきらめてたまるかあああつ!!」

その時、ZガンダムとRガンダムから虹にも似た光が溢れ出た。

これはサイコ・フレームなの?

兄さんの機体からも光が出ている。

人の意思が、思いが集まっている。

そうか、これが……可能性の力なんだ!!

「いつけえええええっ!!」

僕は叫んだ。光は意思を持ったかのようにアクシズと包みこみ、前部のアクシズに光の道を繋いだ。

そして、取りついているMSを、僕と兄さん、アムロ、シャア・アズナブル以外のすべてを弾き飛ばした。

そうだね……僕たちだけでいいよね……

「ごい……さ……ん」

意識が徐々に光の中に溶けていく。温かい光。

僕は心地いいなかで目を閉じた。

——タスケテ……ダレカ……

子供の声が……幼い少女の声が聞こえた。

君は……だれ?

——ワタシハ……

良く聞こえなかった。

それが最後に、僕の意識は完全に光の中に消えた。

第二話 星空の夜に

一夏サイド

深夜。わたしはいつもの様に、星を眺めに外に出ていた。

季節は冬。コートや手袋、ニット帽をしているが、正直に言つて寒い。それにわたしが星を見ている場所は小高い山の上。今日は月が綺麗に出ているから比較的明るい。それでも森の小道は木々に月明かりを遮られて、薄暗い。

それにちよつと怖い。

ならなんで来たのか？

星が好きだからとしかいえない。

森を抜けると、小さな丘に出た。

わたしは手を空に伸ばした。

届きそうなのに届かない。掴めそうなのに掴めない。

すぐに往けそうなのに、あの場所に往けない。

「……………」

虚しいだけのこの行為を、わたしは小さいころから何度もしていた。

いつかあの、光り輝く星の海に往きたい。
純粹にそう願っていた。

「ここに居たのですね、一夏様」

静かな空間に澄んだ声が響いた。

後ろを振り向くと、同じようなコートを着た銀髪の少女が立っていた。冷たい夜風でセミロングの銀髪が月明かりを反射して、キラキラとゆらめいた。

その人は家族のクロエさんだった

「……なに？」

わたしはクロエさんに素っ気なく言った。

「束様がどちらに行かれたか、心配しておりましたからお迎えに上りました」

「……分かった。いつもごめんなさい、クロエさん」

クロエさんは「いいのです」と小さく微笑んだ。

いつものことだけど、束さんは少し心配性だ。

わたしだって、もう15になるのに……やっぱり、あのことが原因なんだよね。

「さあ、体を冷やささない内に帰りましょう」

「うん、そうだね……っ！」

不意に頭の中を何かが過った。

この感じは……なに？

「夏様？」

森の中に……誰かが居る？

わたしは走り出した。なぜかはわからないけど、この先になにかがあると思うから。

「夏様？どこに行くんですか?!」

慌てた声を上げるクロエさんを置いて、薄暗い森の中を夢中で走った。

走って、走って、息が苦しくなるのを忘れて走っていった。

「はあ……はあ……」

大粒の汗をかきながら走っていると、開けた空間に出た。

そして、驚いた。

「なに……あれ……」

全長が20メートルはありそうな、巨大なロボットが2体、倒れていた。

わたしは初め東さんの新しい発明か何かなのだと思っただけ、違うのだとわかった。

これは……ISとも違う何かだ。

「夏様………いつたいたのですか？…なんですか………あれは？」

追いかけてきたクロエさんも巨大なロボットが目に入って、啞然とした。

わたしはロボットに近づいた。

「近づいては危険です!!」

「……大丈夫……アレからは危険な感じはしない」

「ですが……」

そうわかっていても、わたしとクロエさんは恐る恐るとロボットの足元まで来た。

白と薄紫のラインが入ったロボットと、黒と濃い赤のロボットは両方とも、動く気配はなかった。

まるで長い年月を掛けてゆっくりと朽ちていった車の様に、塗装が剥げ、装甲の至る所がボロボロだった。

なんでこんな状態なんだろう？

わたしが考えていると、突然白いロボットの胸の部分が動いた。

扉の様に開いた中から、青い宇宙服のようなものを着た人が出てきた。

「夏様!」

クロエさんがわたしを守るように前に出た。

なぜだろう。

この人から不思議な感じがする。

ユウキサイド

気が付けば、コクピットに座っていた。

中が真っ暗なのは機体が停止したのだろうか。

それよりもここは何処だろう？

朦朧とする意識の中で、僕は体が重いことに気が付いた。

重力がある。

ここは宇宙じゃないの？

外に出ようとしたら右側に体が落ちた。

機体が横たわっている。

体が思うように動かないが、なんとかハッチを開ける事が出来た。

外に出ると、空の月明かりが綺麗だった。

ここは地球なの？

「一夏様！」

突然声が響いた。

振り向くと、白銀の髪の少女と、その後ろに黒髪の、前の子より少し小さな少女がいた。

銀髪の子は後ろの子を守るように構えている。

僕はヘルメットを脱いだ。

肌を差すように寒い。

澄んだ空気が辺りを静寂にしていた。

「君たちは……」

瞬間、体から力が抜け、崩れるように膝をついた。

いきなりの疲労感に、なにがなんだかわからない。

「大丈夫？」

顔を上げると、後ろに控えていた女の子が顔を出していた。

僕は座り込んで「大丈夫」と言った。

「きみ、ここは何処？」

「ここ？日本の山奥……」

「ニホン？」

確か東アジアの島国だっけ。

何でそんなところに居るんだろう？

そう逡巡したが、同じように横たわる兄さんの機体が目に入って、考えるのをやめて立ち上がろうとした。

が、足に力が入らない。

「悪いけど……僕をあっちの機体に連れて行ってくれない？」

「……………」

明らかに警戒されている。とくに銀髪の子に。

しまったな、と思っていると後ろの子が前に出てきた。

僕の横まで来ると手を差し出した。

「クロエさんも手伝って」

「一夏様……しかし……」

「大丈夫、この人から悪意は感じないから」

「……分かりました」

黒髪の子に促されて、銀髪の子も手を貸してくれて、なんとか立ち上がる事が出来た。

その時、黒髪の子から不思議な気配を感じた。

「……きみ名前は？」

「一夏。こっちの人は」

「クロエです」

「僕はユウキ。ユウキ・キサラギ。ありがとう、クロエちゃんに一夏ちゃん」

ふたりに支えられながら、兄さんの機体まで来れた。

胸部にあるコックピット外部開閉レバーを引いて中に入ると、ワインレッドのノーマ

ルスーツを着た兄さんが、僕と同じようにシートに座っていた。

「兄さん！」

三人で外に担ぎ出した。

ヘルメットを脱がすと息はしていた。

気のせいか、若干若返って見えた。

「よかった。生きている……」

安堵したが、ここは野外。それに気温も低い。

兄さんを何処か、安全な所で休ませないといけない。そう考えていると一夏

ちゃんが、

「その人……家で休ませる？」

と言ってきた。

「いいの？」

「たぶん。それにその人、ユウキさんの家族でしょ？」

「そうだよ」

「なら、助けない。わたしはそう思う」

一夏ちゃんの一言は何から何までありがたい。

けど、どうやって兄さんを運ぼうか。

周りは森。さつき一夏ちゃんは山奥と言った。

僕はこんな状態だし、女の子二人に担がせるわけには……

「クロエさんもそれでいい?」

「……わかりました。確かに危険はないようですし、ケガ人を放っておくほど私も鬼ではありません。一夏様に従います」

「うん、ありがとう」

「では、一夏様はユウキ様を。私はこちらの方を」

そう言うときクロエちゃんは、体重70キロはある兄さんをひよいと背に乗せてしまった。そして何事もなく歩き出す。

え? きみ本当に女の子?

「それでは行きます。ついてきてください」

「あ、うん。わかった」

一夏ちゃんに手を持ってもらい立ち上がり、先導してくれるクロエちゃんの後ろをついていった。

クロエサイド

わたしはクロエ。性はありません。

この名前もわたしの恩人である、束様から頂いたものです。それまでは番号で呼ばれていました。

今日も一夏様は星を見にラボの外に行かれ、わたしは束様から迎えに行くよう言われました。

ラボの裏にある小高い山の上にある丘は、一夏様のお気に入りの場所です。徒歩で二十分ほどかかりますが、わたしは駆けていくので十分で行けます。動きにくいコートを着ていますが、問題などありません。

そう訓練されてきました。

だから、人を一人背負って山を下りるくらいはできます。

この人は大体、70キロ前後ですかね。これくらいなら、ラボまでの道のりは余裕です。

「みんな……………」

歩いていると背の人が呟きました。

しかし、それは誰かに謝る様な呻き声でした。

「ごめん…………ごめんね……………」

「……………」

一筋の雫が彼の頬を伝っていった。

この人は多くの人の死を背負っている。

わたしが想像したこともない、恐ろしい光景を見てきたのだと感じずにはいられませんでした。

根拠はありませんが、そう思ってしまった。

「……………俺は……………みんなを……………」

不思議でした。

覽されているのに、この人から温かい何かを感じました。

安心してしまう何かを……………優しい何かを……………。

「……………なんだろう……………これ……………」

そう考えていると、いつの間にかラボの入り口が見えてきました。

第三話 天災との邂逅

東サイド

少し前、いっちゃんがいっつも星を見に外に出て行った。

何かあったら心配なのでクーちゃんに少ししてから迎えに行かせた。

自分でいけばいいんだけど、私はある物を造るので手が空いていなかった。

「よし、後はいっちゃんのバイタルデータを入れれば8割方は完成かな」

ディスプレイ画面に映る白いIS。いっちゃんの専用機《白桜姫》

ISっていうのは略称で、正式名はインフィニット・ストラトス。簡単に言うと私が

14歳の時に作った宇宙に行くためのマルチフォーム・スーツ。私は何を思ったのか、そんなものを作った。

理由？宇宙に行ってみたかったからかな。

近年、宇宙進出に停滞化したこともあって正直、画期的な発明したかなって思ったよ。

私、こんなんでも天災って世間だと言われているからね。

けどね、開発当時は注目を浴びるどころか、見向きもされなかった。

所詮は子供の作った玩具、なんて言われちゃった。

だから私は親友とある事件を起こしたんだ。

世界を変えてしまった事件。

今思えば、若気の至り……なんだと思う。

日本を射程にしているミサイルが配備してある軍事基地のコンピュータをハッキングして、全弾日本に発射。私の開発したIS一号に乗った親友に、バーンと全部撃墜してもらい最高のデモンストレーションを披露した。

ついでに鹵獲しようとした、アメリカや自衛隊のイージス艦と戦闘機も無力下した。

これで、分かってくれたかなって当時は思った。

でも、後さき考えない行いだっただと今では後悔している。

それからいろいろあって、ISのコアを467個、世界にばら撒いて行方をくらました。

まあ、意外と近くにいたけどね。

キーボードを打ち終えて、時計を見た。

クーちゃんを行かせてから、かれこれ1時間。

うくん……それにしても遅いな。

いつちゃんが星を見る場所はここから徒歩で20分くらいにとこころ、だけどクーちゃ

んなら10分ぐらいで追いつくはずだけど……何かあったのかな。

「私も行ってみるかな」

そう思いながらいると、ドアが開く音がした。

「クーちゃん、いっちゃんお帰り〜。遅いから東さん心配してたぞ♪」

「遅くなつて申し訳ありません、東様」

「いいよ、いいよ……つてその背に背負つてる子は？」

「森の中で倒れていた巨大なロボットの中にいました」

え？！ロボット？！

クーちゃんの言っていることがよく分からないでいると、いっちゃんも誰かに手を貸しながら歩いてきた。

宇宙服のようなものを着た、女の子。

だれ？

「ただいま、東さん」

「おかえり、いっちゃん。そっちは？」

「え〜とこの人は……」

「ユウキ・キサラギといいます。一夏ちゃんとクロエちゃんに森の中で……」

「ストーツ！まずはクーちゃんが背負っている子をベッドまで運んでから。クーちゃ

んその子を奥まで運んで

「わかりました」

「後、君も休んで」

「けど……」

「そんなフラフラな状態の人は休みなさい。話はそれから。いつちゃん、この子も運んであげて」

「うん、わかった」

ふたたりを運んだ後、いつちゃんとクーちゃんに再度確認したら……

「つまり、森の中に20メートルくらいのロボットが二体倒れていて、あの二人はその中に居たと」

「うん、だいたいそんな感じ」

愕然とした。

森の中に、それも目と鼻の先にそんなものがあるなら、なんで気が付かなかったのか。こここの居を構えて、2年ほどになるけど、そんなものはなかったはず。

そもそも20メートルクラスのISが完成したって話は聞いたことないし、まして最近落ちたのだったらリーダーに反応があるし、いつちゃんの話だとその線は薄いかな。

「うーん……あの子たちから話を直接聞くしかないかな。今日は遅いし、いつちゃんも

クーちゃんも早く休みなさい」

「はい」

「うん、分かった」

ユウヤサイド

目が覚めると薄暗い部屋のベッドの上にいる。

体が重い。重力がある。

コロニーか、艦の医療室か？

いや、ノーマルスーツを着たままいるから違う。

どこかに運び込まれ拘束されたか。

「此処は……」

体を起こして部屋の中を見渡す。

監視カメラの類は見当たらない。

右腰のホルスターを確認すると拳銃はそのままだ。

ここに運んだ奴は、身体検査が雑なやつで助かった。

ホルスターから拳銃を抜き、扉を少し開けて、安全を確認してから全開にした。

部屋から出てみるとそこは電子機器が散乱してあった。

「本当にどこなんだ……」

研究所? いや、それにしては警備が無く、静かすぎる。

「おやく気が付いたんだね。君」

「っ!!」

反射的に拳銃を声がした方向に向けた。

そこにはウサギ耳のようなものを付け、大昔の童話に出てきそうな青いワンピースを身に纏った場違いな女がいた。

「あんたは?」

「私? 私は篠ノ之束。世間じゃ天災なんて揶揄されてるけど、しらない?」

頷いた。

あいにく、そんな奴の名前は知らない。

「それに名乗るなら、まずは自分からじゃないの?」

頬を膨らませながら篠ノ之束は言った。

歳は20代前半ぐらいに見えるが、まるで子供のようだ。

「ユウヤ・キサラギだ。篠ノ之束、ここは何処だ?」

「此処? 此処は束さんの秘密のラボなのだ♪君ともう一人、確かユウキっていったけ?」

「ユウキがここに居るのか?! 何処に!」

「今は奥の部屋で休んでるよ。身体的な疲労があったからね」

「そうか……礼を言う」

「そういうなら、それをしまつてくれるかな？ 恩人にそんな物騒なもの向ける人は、東さんは嫌いだな」

ホルスターに拳銃を入れた。

無害とまではいかないが、危険はないだろう。

それよりも……

「篠ノ之束」

「うくん、なんだい」

「アクシズはどうなった？」

そう。アクシズは地球に落ちたか、落ちなかったのか。俺はサイコ・フレームの光に包まれてからの記憶がない。

此処に五体満足に存在していることは、落下はしなかった可能性が高い。
しかし、

「アクシズ？なにそれ？」

「小惑星アクシズに決まっているだろ。ネオ・ジオン軍が地球に落とそうとした」

「あのさ……君、頭大丈夫？」

なぜか、かわいそうな人を見るような眼差しで返された。

「……質問を変える。今は何年の何月何日だ？」

「西暦20XX年の○月△日だっけ？」

「西暦20XX年?!」

啞然とした。

100年以上も過去にいるのか？

いったい俺たちに何があつたんだ。

一夏サイト

「ん……朝……」

枕もとにある目覚まし時計を見ると6時過ぎ。

昨日は遅かったからちよつと寝過ぎしちゃったな。

わたしは。パジャマから普段着に着替えて、リビングに向かう。

ここでの料理はわたしがしている。

東さんは栄養ドリンクとカロリーメイトしか食べないし、クロエさんはゲル状のものを作ってしまう。

東さんは気にしないで食べていたけど、わたしには無理。クロエさんには悪いけどあれは人の食べるものじゃない。

「あれ？」

リビングの明かりがついていた。

クロエさんかな？

でも、いい匂いがする。

「あ、おはよう一夏ちゃん」

昨日森の奥に倒れていたロボットに乗っていた人——ユウキさんがクロエさんのエプロンをつけ、鍋を持って台所に立っていた。

「なにをしているのですか？」

「これ？朝ごはん。昨日のお礼にね。ちよつと冷蔵庫の中の物を使わせてもらったけどだめだったかな？」

鍋の中は野菜スープだった。野菜が溶けていい匂いがする。

わたしは首を横に振るとユウキさんはニコリと笑った。

「体の方はもう大丈夫ですか？」

「うん、お陰様でね。ぐっすり寝たらよくなったよ。本当にありがとう一夏ちゃん」

「い、いえ、わたしはなにも……ただ、ユウキさんから不思議な感じが……」

「不思議な感じ？」

しまった。

「えっと……その……」

私は逃げるように俯いた。

不思議な感じって変だよね……やっぱり。

でも、

「不思議な感じか……そうだね。一夏ちゃんはどう感じたの？」

「え？」

私は顔を上げた。

「僕は一夏ちゃんから温かい何かを感じたよ。一夏ちゃんは？」

「わ、私もユウキさんからそんな感じがした……と思う」

曖昧にしか答えられなかった。

ユウキさんみたいな人と会ったことなんてなかったから。

「……そっか。なら僕たち似てるのかもね」

ユウキさんは優しく微笑んだ。

まるで……そう、お母さんみたいな優しい笑顔。

私はいつの間にか頬が熱くなっていた。

「あ……お、お手伝いします。何をすればいいですか？」

「そうだね、あとはパンとタマゴを焼くぐらいかな」

「はい！まかせてください！」

ユウキさんというと安心する。

これが温かいっていうのかな。

私は急いでエプロンをつけて台所に入った。

第四話 戸惑い

ユウヤサイド

「いったん整理する。俺たち二人は森の奥に倒れていたMSの中にいた。ユウキが貴女の家族の一夏とクロエに助けられ、俺もMSの中から此処に運ばれた」

「そんな感じだね」

「再度確認だが……今は西暦なんだよな」

「それ何度目？いい加減にしてくれない？ほらこれ見る！」

篠ノ之東は何処からともなくキーボードとディスプレイを空中に投影した。

無数に開かれたディスプレイに俺が言った事を検索に掛けるが、どれひとつ当たることはなかった。

「ほら、これで分かった？君の言う、アクシズもネオ・ジオンって軍隊もどこにもないの！存在そのものがね!!」

強い口調でそう言われた。

俺だって信じたくなってこんな事を言っている訳ではない。

あまりにも現実味がなさすぎる。

目が覚めたら、MSごと過去か異世界に飛ばされました、なんて誰が信じるんだよ。

「……………そうか、すまん」

「……………私こそごめんね。ちよつと言い過ぎた」

落胆した俺を見かねてか、篠ノ之束は優しく語りかけた。

「ね、君たちの事を話してくれる？ここまで話が食い違っていると、私もいろいろと混乱してるから」

「ああ、わかった」

俺は記憶してあることをすべて話した。自分の世界のこと、従軍した一年戦争から始まり5度の戦乱のことを知っている限り。無論、自分がニュータイプであることも。

「じゃ、君たちは小惑星アクシズの落下を止めるために、ええつとMSっていう機動兵器で、敵軍同士で戦って、結局は同じように止めに行つて、気が付いたらこの森にMSごといた」

「ああ、そうなる」

「なるほどね……………宇宙世紀にコロニー、人類の革新ニュータイプ……………作り話にしては面白いかな。まあ、そのMSを見れば私も信じるかもね」

ま、妥当だ。話してなんだが、俺でも信じないだろう。

「でも、人は宇宙に行っても、争ってばかりなんだ」

「……………」

なぜだか、呟いたそのときの彼女は、寂しさと、どこか納得がいった顔をしていた。

「なら今からMSを見に行くか？場所はわかるんだろ？」

「うーん、そうしたいけど朝ごはん先に食べてから、みんなで行こうか。その方が楽だしね」

「わかった。そうしよう、篠ノ之束」

「私の事は親しみを込めて束さんと呼んでほしいな、ユー君」

「……………ユー君？」

「ユウヤだからユー君。私は親しくする人にはあだ名で呼ぶんだよ」

「ユウキはどうする？」

「ユーちゃんでしょ？」

屈託の笑みで束はそう言った。

「……………わかった。改めてよろしく束」

「こちらこそ♪よし、それじゃ、食卓にレッツゴー♪」

鼻歌を歌う束と一緒に食卓まで歩いていく。

俺はつくづく、このタイプの女性は苦手だと認識した。

食卓に着くと既に朝ごはんが準備されていた。

俺たちの分も含めて、5人分が食卓に並べられていた。

目玉焼きを乗せたトーストに色鮮やかなサラダ。

どれもおいしそうだ。

「あ、おはようございます。もう、お加減はいいんですか」

かわいらしいエプロンをした小柄な少女がキッチンから顔を出した。

「ああ、君たちには感謝している。えっと……」

「一夏です」

「一夏、改めて礼を言うよ。俺たちを助けてくれてありがとう」

そう言うと「大したことじゃないです」と恥ずかしそうに顔を逸らした。

「恥ずかしがる一夏ちゃんもカワイイね、兄さん」

「そう……だ……な……」

エプロンを着たユウキが、スープを両手に持ってキッチンから出てきた。パイロットスーツを半分まで下して、両袖を腰のあたりに縛っていた。

何やってだよ……

「なんで、そんな所に居るんだ？」

「いや〜だって、一晩とはいつてもここでお世話になったし、なにかお返しをと思って

ね。はい、これが兄さんの分ね。後、クロエちゃん呼んできてくれる？」

「……一夏がいけば」

「一夏ちゃんも僕も手が空いてないし……」

じゃあ、東……と言おうとしたら、即ち朝ごはんを食べていた。

どうやら俺しかないようだ。

「分かった。彼女の部屋は？」

「この先の突き当りの部屋です。お願いします」

「了解した」

何となく嫌な予感がしたが、俺はクロエの部屋へ歩き始めた。

クロエサイド

「しまった」

目を覚ましたわたしは、時計を目にして急いで布団を退けて、体を起こした。

いつもなら朝ごはんの支度を一夏様と一緒にしなければいけないのに、寝過ごしてしま

まったからだ。

わたしは急いで寝間着を脱いだ。

まさか、昨夜に運んだことの疲れがでたのだろうか？

いや、それよりも今は急いで支度しなければいけないと、服を着ようとした。

ガチャ——扉がいきなり開いた。

「……………あ」

「……………え」

昨夜、わたしが運んだ人がそこに居た。

え？え？ええええええええ?!なんで部屋に来たのこの人?!!

しかもわたし……………いま……………

体温がぐんつと上がっていった。

「あ、いや……………」

「きゃああああああっ!!」

自分でも驚くほどの悲鳴を上げて、直ぐそこにあつた目覚まし時計を投げた。

「うおっ!」

彼は目覚まし時計を寸でのところでよけた。

今度は枕を投げようとして言った。

「は、早く閉めてください!!」

「すまんっ!!」

彼はすぐに扉を閉めた。

わたしは枕を手放すと、力なく座り込んでしまった。

なんでこんなに心臓の鼓動が速いの？体が熱いの？

今まで異性に裸を見られても、こんなことはなかったのに、これはなに？
考えても考えても、その時のわたしにはよく分からなかった。

一夏サイド

「……………」

「……………」

「……………え〜つと…なんかごめんね、クロエちゃん」

ユウキさんが苦笑いしてクロエさんに謝った。

今、朝ごはんを食べていますが、空気が冷たい。

冬だから、と言うわけじゃないなくて、すごく気まずい空気ということですよ。

特にクロエさんとユウキさんのお兄さん——ユウヤさんの二人。

ユウヤさんがクロエさんの部屋を訪ねたら、運悪く着替え中だったらしい。ノックしない人が悪いよね。

それにしても悲鳴を上げた、というかあんなクロエさんは初めて見た。

本人には悪いけど………なんか新鮮でかわいかった。

「今日も今日でいっちゃん作ったご飯はおいしいね」

「うん、ありがとう」

東さんはそんなこと気にせずスープを口に運ぶ。

今日の朝ごはん作ったのはユウキさんだけど内緒にしておくことにしよう。

ユウキサイド

「おお〜これがMS? すごくいいすごくいい!! こんなのものは、はじめてみたよ!!」

朝ごはんを食べ終えた後に、僕たち5人は助けももらった場所へと来ていた。

東ちゃんは興奮気味にZガンダムとサイコ・ドーガ（兄さんから聞いた）をあらわにちら見ながら、行ったり来たりしている。

僕としては東ちゃんが作り出したISの方がよっぽどすごいと思った。

ここに来る前に、東ちゃんが一夏ちゃんのために造っているISのデータを見せてもらった。3、4メートルサイズのパワードスーツでMSと同じか、それ以上の性能を出してしまうんだから、技術屋として久しぶりに驚いた。難点は男には起動しないことだけだね。

それを置いても、僕はISに興味が出ってしまった。

心躍るってまさにこのことだね。

「ねね、これ動く?」

「うくん、コックピット周りは大丈夫そうだけど、駆動系が老朽化しているから難しいね」

横たわる二機に目を細めた。

Zガンダムもサイコ・ドーガも謎の老朽化で、動かすどころ、起動することすら困難の状態になっていた。

なぜだろうか?

サイコ・フレームの影響?

思い当たることはそれしかない。

「なら、東さんがもらってもいいかな?」

「それは……」

「もちろん、可能な範囲でだけど、特に装甲の材質。今まで見たことがないか合金を使ってるからね」

僕は横目で兄さんを見た。

「いいんじゃないか。でも、こんなスクラップ、なにに使うんだ?」

「フッフ、それはね……」

東ちゃんはこれでもかって、くらいな笑顔で言った。いや叫んだ。
「君たち二人のISを作る為だよ！」

ユウヤサイド

今、東はなんて言った。

俺たちの……ISを作る？

「どうしてそんなことを？」

「それは……まあ、私の個人的なことだけどね」

ユウキの疑問に、浮かれていた表情が真剣なものに変わった。

「君たち二人にお願いがあるんだ………この世界を、今の世の中を壊してほしい」

東の言ったことが分からない。

世の中を……壊す？

「どういう意味かな？」

「今の世界情勢は話したよね？」

「ああ」

「うん」

「私が作り出したI Sのせいで、女尊男卑なんて訳の分からない世界になって、私の夢……I Sは本来の役割、宇宙へ行くための翼になっていない。人を傷つけるだけの兵器に成り下がっている。だから……変えて欲しんだ」

「なんで俺たちなんだ？そもそもI Sは男に反応しないんじゃないのか？」

「そうだね。世界中にばら撒いたヤツはそうなってる。私も馬鹿じゃないからね、そういう風にしたんだよ。設計も私しか知らないし。そうしなかつたら今頃、戦争やつてるよ」

「おいおい、それは勘弁してほしい冗談だ。」

もう戦争をするのはこりごりだし、そもそも異世界のいざこざに介入するほど、お人よしでも馬鹿でもない。

俺は断ろうとしたが、

「い、い、い」

何事もなくユウキは答えていた。

「ほんとう?!」

俺は耳を疑った。

「ユウキ？なに言っているんだ！」

「ただしI Sは僕と一緒に作ることが条件かな」

「ユウキ!!」

「兄さん、僕たちは彼女たちに助けられたんだよ、恩返しと思えばいいじゃない。それに僕たちが此処に居る理由がこれかもしれないって思うんだ」

「世界を変えることがか?」

「……たぶん、この世界はこのままいけば、僕たちの世界みたいになるかもって思う」

「どういう意味だ?」

「束ちゃん……あの人みたいな危なさがある」

「っ!!」

何故か心当たりがあった。

まさか……………

「それに、僕は信じてみたいんだ。この世界の、人の可能性をね」

「それは……わかった——束、俺も受けよう」

可能性の力。

俺はあの時、それ気づかせてくれた人の想いの力を信じることにした。

「ユ一君もユ一ちゃんもありがとう!!」

そう言うとう束はユウキと俺を一片に抱きしめた。

でもなぜか胸騒ぎがしてならなかった。

世界を変える。

そんな事が出来るのだろうか。

なにも救えない俺は……本当にできるのだろうか？

第五話 専用IS完成

ユウヤサイド

俺たちが束の願いを承諾してから三ヶ月がたった。

今更ながら、自分たちが若返っている？ ことが付いた。

大体、20歳くらいか。一年戦争が始まった時がそれくらいだから、13歳分若返ったはずだ。

裏手にあつた俺たちのMSは束のラボへと運び込まれ、解体されISに生まれ変わった。つたつた。

驚くことに彼女のラボは意外にも、いや、想像以上に巨大な施設だった。MSが二機まるまる収まつてしまうドーム状の施設を地下に造つてあつたからだ。

そこで少しずつ原型を無くしていく乗機を見るのは、なんとも虚しく思えた。

装甲を剥がされ骨格だけになり、今では使えないパーツのジャンク山になっている。

ユウキは束と共にIS開発に動んでいた。技術屋としての血が騒いでしかたがない、と気持ち昂らせながら作業している。

束とも馬が合うのか、いつも以上にはりきっていた。

グリップス戦役以来だったが、変わりなくて安心した。

クロエや一夏とも早くに打ち解け、一夏に至っては「ユウキお姉ちゃん」なんて呼んでべったりとなつている。

その度東が「わたしもわたしも、東お姉ちゃんって言うて言うて！何なら東姉でもいよ☆」と言つては一夏を困らせていた。

二人は開発室に籠り、昼夜問わず作業音が聞こえてくる。

おかげで寝不足気味だ。その辺だけは勘弁してほしい……本当に。

俺たちを見つけてくれた一夏は、物静かな感じをしたおとなしい性格な少女であるが此処の家事全般は彼女が仕切っている。

特に手料理に至っては本当においしい。ユウキにも負けず劣らずだ。

そして最悪の対面だったクロエとはまあ、なんとかなっている。

最初、彼女が俺をここまで運んだ時は驚いたが、雰囲気があいつ等に似ていたことで納得できた。

おそらく彼女は……人工的に造られた強化人間に近い存在なのだろう。

この事はユウキも気が付いたため、本人には知られないように振舞うことにした。誰しも聞かれたくないことの一つや二つは腹の中に隠しているものだ。

俺とユウキを「様」付けで呼んできたが、せめて「さん」にしてくれと頼んだ。

正直そんな呼ばれ方は慣れないし、慣れたくもなかったからだ。

そして今日、遂に完成日を迎えた。

俺、クロエ、一夏は開発室に集められた。

「これが東さんとユーちゃんのコラボ、MSとISのハイブリット第一号でユー君専用機、その名も………《ネオサイコ・ドーガ》！」

ライトアップされたそれを見て思わず息を呑んだ。

両肩部はファンネルラックから大型バインダーに換装。

その表面にはスパイクらしき物——おそらくファンネル——がそれぞれ五つ備わっている。

どっしりとした下半身はギラ・ドーガ系よりザクⅢか、ジ・Oの様にも見えた。カラーリングは元々のワインレッドだが、その姿は原型を留めていなかった。

「この機体は元の《サイコ・ドーガ》を原型に詰めるだけのものを詰めこんだって感じかな。ちよつと大型化しちやつたけど、その分の機動力はちゃんと確保してあるから見た目に反して機動性はいいはずだよ。武装は高出力のハイ・ビームライフル。バインダーにファンネルを十基。シールドには接近戦用のビーム・アックス二本を収納してあるよ。さらに隠し腕！スカートアーマー内部にはビームサーベル二本を搭載してあるから近距離戦でも十分なほどのポテンシャル!!」

「それに胸部にサイコ・フレームを入れてあるから追従性もバッチリだよ」

東とウキの説明にただただ感嘆した。

もはや決戦兵器レベルだ。

そんなオーバースペックのもの作っていいのか？

「じゃあ次いつてみよ〜ハイブリット第2号機、ユーちゃん専用の《アサルト・ゼータ》
！」

二つ目のそれは、全身白を中心に、ところどころ青の配色がなされ、大きさも通常の2、3メートルにまとまっていた。

背中のバックパック部分が原型のZガンダムより大型のユニットを装備している。

「この機体は全距離万能機。背中のアサルトディフェンサーは最高速度時マツハ5を叩き出す高速戦闘用ユニット。2連装ビーム砲を装備。本体にもビームライフル、ハイパーバズーカ、ビーム・メガ・ランキヤー、ビームサーベル、シールドもついて全体的にまとまった機体に仕上がったかな」

「そうだね、しいていえば……ね」

「……うん、そうだね」

流星に変形機能は無理だったな〜と二人は残念そうにつぶやいた。

おまえらは何を作ろうとしてるんだ？

「さあ、次はクーちゃん機体だよ」

「……………え？」

呼ばれたクロエは目を見開いて驚いた。

「ハイブリット第3号機、《シユヴァルトエア・シユネーシユツルム》！」

3つ目のそれは、《アサルト・ゼータ》のスリムな体躯の真逆、

黒い重騎兵を連想させる鈍重な姿をしていた。

《ネオサイコ・ドーガ》に近いな。

「コンセプトは圧倒的制圧力。装備の殆どを実弾性の火器にした、まさに歩く火薬庫だね。本体武装は3連装MLRSを2基、これはパージ可能ね。25mm6連砲身ガトリング砲、30ミリ滑走砲、アサルトライフル、マシンガン、バズーカその他もろもろ。近接武装は超大型ヒート・サーベル。両腕に3連ガトリングガン。見た目に反して、機動力はあるから、近づかれてもクーちゃんなら落ち着いて対処できると思うよ」

「……………わたしも……………いいのですか？」

「もちろん。クーちゃんの分も作ってあげなきゃ不公平だからね。昔使っていたやつを改修機みたいなものだけど、その辺はごめんね」

「いえ……………身に余る光栄です！ありがとうございます！束様！」

満面の笑みでクロエは感謝した。

彼女が笑ったところは初めて見たな。

「そんなに固くなくていいんだけどな。ま、いつか、最後にいつちゃん！」

「うん！」

最後に一夏の機体をライトが照らした。

ユウキのよりも純白、高潔さの中に優雅さを兼ねた騎士の様なシルエットの I S が静かに鎮座していた。

「私が 8 割方完成させたものに M S の材質と技術を合わせたいつちゃんの専用機、《白零姫》だよ」

「綺麗……まるで星を形にしたみたい綺麗面白……これがわたしの I S……」

一夏は手に触れ、小さく呟いた。

確かに美しい I S だ。

「この I S には「展開装甲」を全身に施して、攻撃・防御・機動、あらゆる状況に対処できることが可能。基本武装は接近戦用長刀「雪片惨型」と左腕にエネルギーシールド「麗(れい)月(げつ)」の 2 つ。「雪片惨型」はエネルギーを溜めることで、斬撃をエネルギー刃にして出す事が出来る。「麗月」はエネルギー兵器を防ぐだけじゃなくて、エネルギーを一点に集中することで強力な攻撃ができるよ。二基だけドビッドを備えて、あとは……」

不意に東の説明がそこで止まった。

その先を言っていないのか躊躇っているように見えた。

「まあ、これはいいね。使うかどうかわからないし。それじゃ初期化と最適化をすませ
ちやおつか♪まずはユー君からね。これに着替えてISに乗って」

そう言われ、差し出された赤のダイビングスーツのようなものを受け取った。

これがIS専用のスーツか。

ちなみに、クロエと一夏は黒であった。

「了解した、ちよつと待っていてくれ」

俺とクロエ、一夏は、部屋から一度退出して、着替えを済ました。

部屋に戻ると二人は先に着替え終えていた。

ISスーツは肌に沿うようにぴっちりとしている。

だから、二人の身体のラインがくつきりと出てしまっていた。

「……………」

「……………」

「…ああ、すまん」

なぜか、俺は謝った。

ちよつと見ただけで、クロエと一夏の視線が以上に痛い。特に一夏。

気まづくなった俺は、逃げるように I S へ乗り込んだ。

やましいことなんて何も思っていないぞ。

……たぶん。

「それじゃ、始めるね」

開閉した I S に体を入れるとゆっくりと閉じた。

装甲を纏う、窮屈な感じを想像していたが意外とそうでなく、肌に合うようにぴったりとしていた。

システムが起動してデータが流れこむ。

室内の映像が映し出された。

凄いな。三百六十度すべての方向を見る事が出来る。

束とユウキは投影したキーボードを、ピアノを叩く様にキーを打ち込んでいく。

「さ、おつわりく♪さっすが束さんとユーちゃんの共同作業、2, 3分で済ませたよ」
イエーイ、と二人はハイタッチをした。

本当に仲がいいなおまえら。

「で、兄さんはどう?どこか不具合でもある?」

「いや、問題はない。大丈夫だ」

「そりゃくユーちゃんと作った I S だからね。不具合なんてあつたらそれこそ、ユウ君

の方にあるんじゃないのって感じになるよ」

まあ、コアとの相性も有るしねと言うとISは光の粒子になって消え、首にネックレスが掛かっていた。

俺はそのネックレスのデザインに見覚え、もとい知っているエンブレムのデザインをしていた。

それはシャアが率いた新性ネオジオン軍の軍旗をまんま象つたものだからだ。

「これは……」

「どう？ 気に入った兄さん」

「言いたいことはあるけど……まあいい、ありがとう」

俺は複雑な心情の中、礼を言った。

またこのエンブレムを背負うのか……。

「それじゃ、残りもこの調子でいってみよるか。次はクーちゃん」

「はっ」

歯切れのいい返事で、クロエがISに乗り込んだ。

余程、自分に専用機が用意されていたことがうれしいのだろう。

あらためて見てみると、彼女のISの脚部はドム系列の最終型《ドライセン》のような形状をしている。重武装を運用するにあたって機動力を補うためのだろう。これ

に攻撃力が伴っているから恐ろしいことだ。

こちららも、問題なく3〜4分で済ませてしまった。

待機状態になった《シユヴァルツエア・シユネーシユツルム》は、彼女の左手にリングとしてなった。

「それしや、いっちゃん」

「はい」

一夏も歯切れのいい返事で、乗り込んでいく。

「これが宇宙に行くための翼……」

「ふふ、そうだよ。これでいっちゃんの夢が叶うんだよ」

そう言われた一夏は小さく微笑んだ。

「さて、これで完了ッ」と

一夏の初期化と最適化は予想以上に早く終わった。

束が8割方完成したと言っていたから、おそらくデータを予め入力していたのだろう。

待機状態はガントレットになって左手にはまった。

「ユウキはやらないのか？」

「僕？僕はもう済ませたからね」

「一番にやったのか？」

「そりや、僕と東ちゃんが作ったんだよ。完成したその時にパパッとやった方が効率いいでしょ？」

と言っているが、目が無邪気な子供の様にキラキラしているので、我慢できずにやってしまったのだと丸わかりだった。

ユウキが自分のＩＳに触れると、俺と同じような白い一角獣の形のネットワークスになった。

「よし、ＩＳも全員分できたわけだし、これからの事を報告しまゝす」

全員の初期化、最適化を終え本題に入った。

「世界を変える……具体的にどうすればいいんだ？」

「そだね。端的に言おうと、ユ一君たちはＩＳ学園ってところに入ってもらおうよ」

「ＩＳ学園？」

「そう。ＩＳに関する人材を育成している、ＩＳ操縦者育成用特殊国立高等学校。そこはあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家、組織にでも学園の関係者には一切の干渉が許されない。だから、他国とのＩＳの比較、新技術の試験場みたいなところかな。ユ一君は世界初の男性操縦者としてＩＳ学園で、今の歪んだ思想を正してほしいかな？」

「つまり、広告塔の俺が、I Sの本来の使い方を広めるでいいのか?」

「そうそう、そんな感じ。だけど、干渉されないなんて嘘。束さんが分かっている限り、何十回も産業スパイや他国の組織が出入りしている。だから、最悪……」

「流血沙汰になる……か」

うん、と真剣な眼差しで束は頷いた。

「分かった。それで、どうやってI S学園に入るんだ?」

「その辺は大丈夫。束さんの力であることないことを募った、経歴四人分でつちあげるから安心して☆」

悪戯めいた笑顔をした。

忘れていたが束は天災と揶揄されていたことを思い出した。

ん? 四人分?

「一夏とクロエも来るのか?」

「あたり♪そのためにクーちゃんのものも作ったんだし。二人とも本来なら青春まつしぐらの歳なのに、こんな山奥の施設に籠ってちゃコミュ症になっちゃうよ。ま、ユー君たちが来なくてもいつちゃんとクーちゃんには行ってもらっていたしね」

「はい。数年前からこの計画を束様と一夏様、お二人は考えておりました。わたしの専用機が用意されていたことは驚きましたか」

クロエの説明に一夏は相槌をした。

この計画は周到に練られていたものらしい。

「それにユー君とユーちゃんには二人を守って貰わないとね。お願いだよ♪」
「だって、兄さん」

東は微笑みながら、ユウキは苦笑気味に訊いてきた。

僅か三ヶ月。接している時間は短いがここでの暮らしは俺にとって掛替えのないものだ。だから絶対に守る。

もう、失わない為に。

「わかった。全力で守りきってみせる」

拳に強く握りしめ、誓うように俺は答えた。

だが、よく考えたら狙われ確率が一番高いのは俺の方だよな。

第六話 15対1

千冬サイド

新学期まであと数日。わたしは頭を抱えていた。

理由はわたしの妹——織斑一夏がIS学園に入学すると友人から連絡があったからだ。

そんなことはいい。一夏は15歳、一般的に高校入試の歳だ。

それより問題は……どういふ顔をして一夏に合えばいいんだろうかということだ。

「お、織斑先生！織斑先生!!」

「なんです山田先生……」

副担任の山田先生が慌てながら駆け寄ってきた。

心なしか、職員室内が騒がしい。

「これを見てください」

「……なんだこれは」

山田先生が差し出したタブレットには

『やつほー!!みんな見てるかな?みんなのアイドル篠ノ之東だよ♪今日はみんなに重大発表があります。それは……なんと男でISを使える人を発見しました!名前はユウヤ・キサラギ。ユ一君と私を入れた五人でIS学園に今からいくからね。入学の準備しておいてね。もし、捕まえようなんて考えていると痛い目に合うから☆ばいばい♪』

友人(ばか)の顔が映っていた。それもLive映像でだ。

わたしは再び頭を抱えた。

東……今度は何をしようとしているんだ。

クロエサイド

「ふう〜、こんなんでいいかな。クーちゃんどうだったかな?」

「いいと思います」

四機のISが完成してから数日後。

東様は世界中のテレビチャンネルをジャックして初の男性操縦者であるユウヤさんの事を公表した。

世界各国の反応は様々で、中には怪しい動きを見せる国、組織、団体がいくつかあり

ましたが気にすることは無いと思います。

どうせ何時でも撃退できる相手なのだから。

「これで第一段階は終了。第二段階に移れます」

「りようかゝい。それじゃ、支度してみんなで行くよ——I S学園に」

「はっ」

わたしは自分の荷物を取りに部屋へ戻った。

この計画は3年前から束様と一夏様が考えた計画。

I Sを宇宙探索マルチフォーム・スーツに戻す。

わたしは一夏様を守るためにいましたが、ユウヤさんとユウキさんを加えたため大幅な修正を余儀なくされました。けどそれは、計画を成就させる時間が短くなったと思っています。

お二人はここから一世紀先の未来か同じ時系列の別の世界から来たと言われた時は信じがたく思いました。

巨大な人型兵器を操り、戦争をしていた軍人。

あの時ユウヤさんから感じたのはこれのことだと思いました。

しかし、あの温かなものの正体はわからぬままです。

あの感じは……一夏様初めて会った時に感じたものに近かった。

……なんでだろう。いつもあの人のことが頭の中にある。

「おくい、クーちゃんいつくよ〜」

「……いまいきます」

東様に呼ばれ急いで部屋を出た。

「すみません。遅くなりました」

「気にするな。みんな今出てきたところだ」

「そうそう」

「うん」

外に出ると既に皆様がいきました。

どうやらわたしが最後だったようです。

「それじゃ、みんな準備はいいかい？」

「ちよつと待て束。まさか……これで行くのか？」

ユウヤさんがにんじんの形をしたロケットを指差しました。

「そうだよっ」

東様は平然と答え、ユウヤさんは小さく嘆息しました

「もつとマシなのはないのか。へりとか」

「そんなのないよ」

「じゃ、列車とか飛行機とかバスとか車とか交通手段はいくらでもあるだろう?」

「それじゃおそいじゃん。そのためにロケットなんだよユー君」

だからなんでもよりによってにんじん型のなんだよつとユウヤさんは項垂れました。

仕方ないです。東様は斜め上に行く人なのですから。

伊達に天災と呼ばれていません。

「まあ、いいんじゃない兄さん。人目に付けずに早くに付けるならさ」

「いやユウキ……人目は絶対に引くぞ」

「大丈夫です。こんな奇妙な形をしていますですがステルス性は抜群です。自衛隊の滞空レーダーに捉えられることはまずありません」

「こんなって……ひどいよクーちゃん」

フオローした筈なのですが、東様は涙声になってしまいました。

おかしいですね。

「とりあえず乗ろう、ユウキお姉ちゃん」

「そうだね一夏ちゃん。クロエちゃんもいこう」

「はい」

「はあ……」

「兄さんも早く」

「はいはい……………いまいくよ」

「むくみんなして束さんを置いていくな〜!泣いちやうぞー!」

わたしたち五人は席に着くと、にんじん型ロケットのカウントダウンを開始しました。

「それじゃいつくよ——3……………2……………1——点火!!」

轟音と強烈な揺れの中、わたしたちはIS学園に向け出発しました。

ユウヤサイド

にんじん型ロケットは以外にも優秀で、IS学園まではこれといって問題なく着くことができた。というかなんで突っ込むんだ?!墜落と大差変わらないぞ、まったく……………

しかし、正門前まで来てみれば、

「篠ノ之東博士!大人しくこちらの指示に従いなさい!!」

「うつわくきちやつてるよ〜」

苦虫を噛み潰した顔を束はした。

案の定、IS学園には束を捉えようと十数機のISが待ち構えていた。おそらくあれがIS委員会とかいう奴らだろう。

「いやだね。それに私は言ったよね。捕まえようとしたら痛い目に合うって……伝わらなかつたのかな？」

「ツ！」

ぞつとするような冷たい空気が場を包んだ。

東が出したプレッシャーだ。

それだけで何人かが怯んでいる。

その中に一夏も含まれているが。

「だ、黙ってこちらの指示に従わない場合は実力行使する。速やかに従え！これが最後通知だ！」

隊長らしい奴は臆しながら強気に言う。と全機が武装を展開した。

やはりこうなったか。

「で、どうする東？」

「しようがないんじゃない。私は言ったことは曲げない主義なんだユー君」

「……わかつた。相手を敵対戦力と判断する。俺は全員を守るための防衛行動をとるぞ。いいな？」

「いいよ。やっちゃえユー君！」

東は満面の笑顔でサムズアップ。

やれやれだ。

「手を出すなユウキ。これくらいなら俺一人でやれる」

「りよくかい。気をつけてね兄さん」

「ああ。わかっているよ」

「き、きをつけて」

ユウキの袖をつかみながら一夏。

「お気をつけてユウヤさん」

「おう」

この状況でクロエはいつも道理だ。場慣れしている。

俺はI S部隊の前まで進んでいく。

「なんだお前は？」

「聞かなかったのか？男でI Sを動かせる者だが」

「世迷言を。なんにもできないゴミはさっさと消えろ！それともここ死ぬか？」

ライフルの銃口が向けながら、隊長らしき女は嘲笑う。

なるほどこれがI Sに魅せられた女性至高主義者か。

UC時代のティターズと似ているな。

崇高な思想の元、力と権力を振るうクソ野郎どもと一緒だ。

見ているだけで吐き気がする。

「なら、これを見ても同じことが言えるか？」

「なに？」

「いくぞ——《ネオサイコ・ドーガ》」

首に掛けてあるペンダントが輝く。

光りが体を包み、量子化された装甲が展開されていく。

両肩にファンネル十基搭載の大型バインダー。

どっしりとした脚部。

モノアイ型のハイパーセンサー。

右手にライフルを左手にはシールドを同時展開。

光りが収まると俺はI S身に纏っている。

「お、男がI Sを？それに全身装甲型（フルスキン）?!」

「どうだ？これで分かっただろう。それじゃ——いくぞ」

スラスターを全開で一気に間合いを詰め、隊長の女にシールドを叩き付けた。

一瞬の出来事に女は避ける事が出来ず、もろにシールドパツシユをくらい吹き飛んだ。

「た、隊長?! 貴様ツ!!」

向けられていた数十の銃口が火を噴く。

すべて実弾か。

避ける必要はないと思つたが、流れ弾があいつらに当たらないよう、俺はスラスターを噴かして上昇する。

「追いなさい！絶対に逃がすな!!」

隊長機の怒声で、一斉に後を追ってくる。

反転して振り向くとハイパーセンサーに表示された敵の数は約十五機。

機種は《ラファール・リヴァイヴ》が十機。《打鉄》が五機か。

まずは足の遅そそうな《打鉄》からいくか。

照準を上がってくる《打鉄》の一機に付け、ハイ・ビームライフルのトリガーを引き絞る。

砲身から放たれた黄色の閃光は《打鉄》に吸い込まれるように命中し黒煙を上げながら落ちていった。

シールドエネルギーが減少していない機を一撃で撃破。

搭乗者は絶対防御があるから死にはしないが、これは……凄い威力だな。

「ビーム?! I Sを一撃ってどんな威力よ!!」

「威力があるってことはそうそう連射出来ないはずだ！近づいて接近戦で仕留めろ!!」

《ラファール》隊は牽制！ 《打鉄》隊は近接戦闘を用意！！

「了解！！」

《ラファール》の部隊が二機一組の最小単位で散開した。

《打鉄》の部隊は射撃武器から近接武器に切り替え、接近してくる。

近づく《打鉄》を狙おうとするが、八方から《ラファール》の銃弾が浴びせられる。《ラファール》を狙うと別の組と《打鉄》隊の近接ブレードが襲いかかる。

なるほど機動力のある《ラファール》が牽制または近接戦を仕掛ける《打鉄》の援護役か。

いい連携だ。しかし、この程度じゃ俺は墜せない。実際奴らの攻撃は《ネオサイコ・ドーガ》のシールドエネルギーを減少できていない。すべてが装甲の防御で止まっている。

このISはMSとの混合機だ。

装甲が一定のダメージを受けた時だけシールドバリアーが起動するように設定してあるらしい。なんでもシールドバリアー分のエネルギーを機体の方にまわさないと稼働時間がないとか。

材質であるガンダリウム合金は月で精製した120mm弾を食らってもびくともしない強度を誇る特殊合金だ。

並の兵器じゃこいつ傷つける事は出来ない。

そのお陰でこっちは、ハイ・ビームライフルにエネルギーをまわせられる。最大でも10発が限界だけだな。

「なんて固いIS！ほんとに効いているの？」

「効いていなくても攻撃の隙を与えるな！このまま攻勢を止めずに押し切れ！」

スラスターを巧みに使い銃弾と斬撃を躲す。

そろそろ操縦にも慣れた。

今度はこっちが攻勢に出るか。

ハイ・ビームライフルを収納。シールドに装備してあるビーム・アックスを取り出す。

ここから俺も接近戦だ。

「このおとおお！」

《打鉄》が振り下されるブレードを紙一重で避け、ビーム・アックスで薙ぎ払う。

咄嗟に防ごうとした右肩部分シールドを横一文字に溶断。そのまま直撃し《打鉄》は墜ちていく。

これで二機目。

「終わらせるか。ファンネル！」

バインダーに搭載されたファンネル十機すべてを射出した。

さすがに十機同時は初めてだが……この感じ、いけるな！

軌道イメージをファンネルに伝達。

「いけ!!」

ファンネルは一齐に《ラファール》部隊に襲い掛かる。足を止め、迎撃しようとした三組はファンネルの餌食になっていった。俺はその隙に《打鉄》の隊に接近。

ビーム・アックスを振り下し一機。シールドに格納してある二本目のビーム・アックスで二機目を沈めた。最後の二機は五基のファンネルで四方八方からのビームを浴びせた。これで《打鉄》隊は全滅だ。

「ビット?!なんなのこの機動力は!速すぎる!!」

「足を止めるな!止めたら——あああつ!!」

「くそ!残存四機!隊長指示を!隊長!!」

この様子だと力押しでいいか。

残りの《ラファール》数機にファンネルを集中。

味方の呼びかけに、後方へ控えていた隊長機は動けないでいた。

一機、また一機とファンネルに墜されていく。

最後に残ったのは隊長機だけになった。

「……そんな……十五機いたのよ。それがたった一機のISに……それも男にこうも

あつさり……………」

目の前の出来事が隊長機には信じられないようだった。

俺はファンネルをバインダーにもどす。

サイコミュの感度は良好だ。ファンネルを動かすのに嫌な負荷が無い。操作性もM Sに似ていて使いやすい。反応性もいい。

あとは適度にエネルギーを回復しないとすぐに内蔵エネルギーが空になってしまうところか。ハイ・ビームライフルは燃費がわるいから、別の装備をユウキに頼むとしよう。

まあこの程度なら大丈夫だろう。

「これでわかっただろう。束の確保は諦めてさっさと帰れ」

「ふざけるな！ここままでしてわたしたち委員会が黙っているとでも思うなよゴミ野郎!! 貴様は殺す!!このエリーゼ・フォン・ベルクが必ず殺してやるから!!」

そう言うのと隊長機の《ラファール》——エリーゼは何もせず降下していった。

俺との力量の差を見て退いたか、一人ではなにもできない臆病者なのか。

なんにせよ、あの手のやつにはまた会う。

どんな巡り合わせかそうなっている。

経験上な。

「面倒なやつに目をつけられたな」

エリーゼとかいうのは置いておくとして……IS委員会か。

厄介なやつらがいるな。やつらは恐らくISを純粹な兵器として使いたがっているな。東が嫌な顔をしたわけだ。

しかし、それも仕方がないことだと思っただけだな。

IS委員会の事はユウキたちと話し合うか。

俺は下で待つ東たちのもとに向かつて《ネオサイコ・ドーガ》を降下させた。

第七話 驚愕の再会

ユウキサイド

幸先よくI S学園の着いたと思つたら、I S委員会のI S部隊十数機が待ち構えていた。

東ちゃん一人を捕まえるのにI S十機以上投入してくるあたり、向こうも本気のようなだね。

東ちゃんが彼女らに向かつてプレッシャーを出したら、一夏ちゃんがびくびくして僕の服の袖を握りしめた。

今の東ちゃんはこわいよね。

臆しながらも銃口を突き付けるI S部隊を敵と見なし、兄さんは《ネオサイコ・ドール》を起動。

隊長らしい子にシールドをぶつけ吹き飛ばして、I S部隊を引き連れ空中に飛び出していった。

手を出すなつて言われたから手を出さないけどね。

正直、あの程度じゃ兄さんを落せる訳がないし、ISの性能が違いすぎる。

それを証明するように一機、また一機と落とされ、十五機いた部隊は残り一機を残して全滅した。

「あ、降りてきた」

先に降りてきたのは隊長らしき子。

その後に兄さんは僕らの近くに降りてISを解除した。

「お疲れ兄さん。どうだった初のIS戦は？」

「ん？まあ、普通だな」

「そう？見た感じ圧勝のようだけど。ね、一夏ちゃん」

「うん」

「束様とユウキさんが作り上げたISにユウヤさんの技量を加えれば負けることはまずないと思いますが？」

「そうだよ。束さんとユーちゃんが丹精込めて作ったのがあんな奴らに負けるわけないじゃん」

クロエちゃんと束ちゃんは淡々と事実を述べた。

確かにそうだけどね。

「それはそうとユウキ。ハイ・ビームライフル以外の射撃武器を制作してくれないか？」

あれじゃいくらエネルギーがあっても足りないぞ」

「ああ、うん。遠距離射撃のやつだし大目に見てよ兄さん♪」

「はあ」

かわいらしくウインクしてみたら溜息を返してきた。いい年したお前が何やってるんだよって目がそう言っていた。

失礼だな兄さん!!僕も乙女なんだよ!!それに、作るんだって資材も時間もかかるんだからね……まったくパイロットは技術屋の苦勞を分かかってないな。

「それで?まだ東さんを捕まえるの?言っておくけど、こっちはそんきなんてさらさらないから」

東ちゃんが冷たい視線を隊長の子に向ける。

うわ、かなり不機嫌だよね。あの子たちに対して。

怒りで唇噛みしめた隊長の子は、

「……………今日のところは引き上げる。貴女にはいつかこちらに来ていただく篠ノ之東博士……………そのことをお忘れなく」

絞り出すように言うのと部隊を引き上げていった。隊長以外はボロボロだったけど大丈夫かな?主に精神面で。

「さあ、うるさいのも消えたし、ちーちゃんに会いに行こうかいっちゃん♪」

ちーちゃんとは一夏ちゃんのお姉さん。

東ちゃんの話では、近所の幼馴染でよく家が営んでいた剣道道場に遊びに来ていた間柄で、10年前にある事件を起こした共犯者らしい。

I S 世界大会初代優勝者で世界最強の I S 操縦者だとか。

「う、うん……そうだね」

一夏ちゃんが強く袖を握りしめた。その顔は暗く、不安に満ち溢れていた。

一夏サイド

ユウキお姉ちゃんの袖を離すことが出来ずに、歩いていく。

ここに来ると決めた日から会うことは分かっていたけど………やっぱり足取りが重くなる。

私は、三年前以前は千冬姉さんと暮らしていた。

ううん、そうでもなかった。

東さんが I S を発表して世界が変わってから、千冬姉さんも変わった。日本代表に選ばれ、第一回モンドクロツソで優勝した時はうれしかったし誇らしかった。けど、それから家に居ることは少なくなり、ほとんどの時間は一人で過ごした。小学校高学年の時

に「なんでそんなこともできないの?」「貴女はあの人の妹にふさわしくない」

と女子生徒や女の先生には言われ、男子からは「お前なんか居なくなれ!」「女性至高主義の元凶の妹」と石をぶつけられることもあった。学校に居る大半の時間、皆から敵意だとか嫉妬、憎悪、憎しみ、恨みみたいなものを向けられてきた。確かに千冬姉さんほどの能力は無いことは分かっていたし、元凶なんて言われても半分無視していた。気が滅入っていたのか慣れたのかわからない。たぶん、中国から転校してきた子が一緒に居てくれたからなんとかなっていたと思う。

今でも元気にしてるかな?

その時も家に居なくて帰ってきててもすぐに出かけてしまう。

何時しか話もまともになくなった。

そして三年前、あの事件が起きた。

「……………」

左手で体を強く抱きしめる。

思い出しただけでも震えが止まらない。

血の気が引き、息が荒く、胸を締め付け、吐き出しそうな嘔吐感がこみあげてくる。

……………どうして来てくれなかったの? 助けてくれなかったの?

なんで……………なんで……………

頭の中がぐちゃぐちゃと気持ち悪い。

「はあ……は……あ……う」

「一夏ちゃん？大丈夫？」

「う……ん……だい……じよ……ぶ」

本当は怖い。怖くて逃げだしたい。

ここに来なくても東さん、クロエさん、ユウヤさん。ユウキお姉ちゃんと一緒に暮していればいい。人目が付かないあの場所ですつといればいい。宇宙に行かなくてもずっと星を眺めていればいい。

弱い自分が叫んでいると、左肩にトンつとユウヤさんが手を置いた。

私は顔を上げる。

「大丈夫だ一夏。俺がお前を守ってやる。必ずだ。だから安心しろ」

ユウヤさんは微笑んだ。

「そうそう。兄さんも僕もクロエちゃんも居るんだから大丈夫だよ」

「はい、一夏様を守るのがわたしの役目です。無論、家族として」

「そうだよ。東さんもみんなもいつちゃんの味方だよ。安心して」

いつの間にか震えが止まっていた。

みんなの温かい思いが流れ込んできたように不安が消えていく。

そうだね、私も前に進まなきゃいけない。

それで夢を叶えてこそ意味があるだから。

私はもう……一人じゃない！

「うん……ありがとう」

私は自然と笑みをしていた。

ユウヤサイド

歩いて20分。ようやく校舎らしき建物の前に来た。ここは無駄に広いな。

人工島って言うのは聞かされていたが結構な面積らしい。

「ん？なんだ」

肌にピリピリとしたものを感じる。

明らかにプレッシャーだ。

鋭い刃物を突き付けられているような感覚。

いったい何者だ？

瞬間、東はプレッシャーがする方にダツシユ。

そこには黒のスーツに同色のタイトスカート。鋭い目つきはまるでハマーンを連想

させるものがある女性が立っていた。

「ちーちゃん!!」

女性目がけてダイブ。抱き付こうとしたが、

「ええ、うるさい!」

「うぎゃ!!」

束の顔面をつかみ、ギリギリと締め上げる——アイアンクローをかけた。

流石の俺もこれには背筋がゾツとするものがある。

「痛い!痛いからちーちゃん!!愛が痛すぎるよ!!」

「そうか。なら存分に味わって潰れろ」

「酷いよちーちゃん」

ああ、彼女が一夏の姉の千冬か。

まるでコントのようなやり取りに、俺はどう反応していいか分からなかった。

「うわく……」

「……………」

「束様はMという性癖でもあるのでしょうか?」

各々反応は様々だった。

ユウキは若干引き、一夏は冷めた目で無言を貫き、クロエは間違った見解をしていた。

「まあいい。それで？」

千冬は東にうんざりしたのかアイアンクローを解いた。

「え？なにが？」

「何がじゃない。今度は何をしようということだ」

「ふふふ、よくぞ訊いてくれたねちーちゃん。東さんの企みは一つ。ここに居る四人を I S 学園に入れて欲しいんだ！」

「お前は……いつも唐突だな。そんなことは無理だ。入るなら試験に合格して入れ。それが社会の常識だ。いくらお前の頼みだからと言って今日明日にできるものだと思うな」

「ごもつともです。流石の束も、

「ええ、男で I S 動かした人でも」

「食い下がるつもりはないらしい。下がってもらっても困るが。」

「そいつがそうなのか？」

「うん。そうだよ」

千冬の鋭い眼差しが東から俺に移る。

やはりピリピリとした殺気じみたものが視線の中に僅かに混じっている。警戒しているな。

「お前は？」

「ユウヤ・キサラギだ。隣が妹のユウキ。俺たちは束と共に I S を本来の用途、宇宙に行くための翼として研究していたんだ。その過程なのか分からないが、俺は I S を起動することができたってとこだ」

「なるほど、つまりお前は I S が使えるのだな？」

「ああ、そうなる。だから俺は、自分が広告塔になって I S を宇宙に行く翼に戻すついでに今の歪んだ思想を排除しようと、ここに来たわけだ。I S 委員会だっけ？ここに来る前に I S 人ほどに襲われそうになったから止む無く防衛処置をとらせてもらった」

「お前が？委員会の奴らを？」

「そうだ。だから委員会に俺の脅威は伝わっているはずだ。いつ襲われても不思議じゃない。ここはいかなる国家、組織でも学園の関係者は一切の干渉が許されない国際規約あるだろ？早い話、かくまってほしいんだ。俺たち四人を」

よくここまでペラペラと嘘の筋書きを喋れたものだな。

しばらく黙り千冬は考え込む。

不自然な点はないはずだ。

「理由はわかった。学園長に直接取り次ごう。しかし、束がわたしと一夏、箒以外にも普通に接している奴がいたとは……驚きだ」

「ぶうく酷いよちーちゃん！東さんだつて昔とは違うんだよ!!」

「ああ、わかつたから黙れ。キサラギ兄妹と一夏、それからお前は？」

「クロエ・クロニクルです」

「クロニクルは付いてこい。学園長室に往くぞ」

ぶうたれてゐる束をほうつて千冬は校舎内に入つていく。

俺たちも後に続いて入る。

「ちよつ?!東さんは?置いてくの?待つてよ!!」

「織斑です。失礼します」

四回ノックをして千冬は扉を開けた。

室内には女性が執務機の椅子に腰を掛けていた。

歳は30位で見た目温和かな女性だ。

この人が学園長……いや、ちがうな。

「どうしました織斑先生……そちらの方たちは?」

「はい。そのことでお話がありました。学園長よろしいでしょうか?」

「わたしは構いません。どうぞお座りになつてください」

促され客人用のソファアに腰掛ける。

「まず初めにわたしが当 I S 学園の学園長轡木滯です。貴方はどの様な用件で尋ねてきたのですか？」

「その前に一ついいですか？」

「どうぞ」

「本当の学園長はどちらに？ 貴女じゃないですよね」

滯学園長の顔が僅かに歪んだ。

「……そうですね。本来は夫である十蔵がその立場ですが、世論が女尊男卑に傾くいま、表向き学園長はわたしに一任されています。それでご不満かしら？」

「こちらもこちらで結構な重要な案件なんですよ。担当直入にいいいますと、私を入れた四人の間をこの学園に入学させたいのです」

「……では貴方が、篠ノ之博士が仰っていた世界で初の男性操縦者なのですね」

「そうなります」

彼女は両手で頬杖を作るとしばし思索した。

「少し前に I S 委員会の方が訪ねてきましたが、織斑先生彼女たちはいまだどちらに？」

「それが……ここに居るユウヤ・キサラギが防衛行動を行い退散したそうです」

「そうですか。IS委員会は是が非でも篠ノ之東博士を確保しようといふ力でいきましたからね。仕方がないと思いますが……あの人数を一人でですか？」

澤代理学園長は驚きを隠せないでいたが、性能差と経験の差があったからだ。既存のISでやれと言われれば流石に無傷は難しいがな。

「……こちらのISも少々特殊でして。いい試験運用が出来ました」

「学園内で戦闘を行ったことは、後日IS委員会と話さなければなりませんね。ユウヤさんも今後そのようなことの無いように願います」

「善処はします。ということとは……」

「はい、入学は了承します。しかし、世間には一応の報告だけはさせてもらいます。それから実技試験も行ってもらいますからそのつもりで」

世間に報告か。束が世界に言ったことの真偽を伝えるためだと思うが、委員会を敵に回さないためだろう。黙っていれば強行手段をもってきそうな連中だからな。

「いえ、こちらこそ。無理を承知での願い、感謝します轡木学園長」

本当は夫の十蔵さんと話し是非を下すところをこの場で決定してくれた。

俺たちは立ち上がり、澤代理学園長に頭を下げせめてもの感謝の意を示した。

学園長室を後にした俺たちは、学園食堂に夕飯を食べに来ていた。

実機試験は明日行うことになっている。もちろん専用機でなく実習機を使ってだ。《ネオサイコ・ドーガ》はなるべく使わないようにしようと思う。アレは強力すぎるからな。非常時以外は実習機を使用しよう。

部屋の方は無理を通して職員用の部屋を用意してくれた。

新学期が始まってからはクロエと一夏は生徒寮に方に移る予定だ。

クラスもその時に伝えてくれるらしい。

いろいろとあつた一日だったが何とかあったな。

「なんとかなったね兄さん」

ユウキがスパゲティをフォークでクルクルと巻きながら言った。

ちなみに一夏は和食のA定食——白米と魚の切り身を焼いたものと味噌汁というスープ、野菜のおひたし？だったか——でクロエはシチューにパン。俺はというと、ハンバーガーを頼んだ。

この場に東が居ないのは千冬と二人きりで話があるからだそうだ。

ラボでも食事は一夏とユウキが交互か一緒に作っていたが、一夏の時だけは和食になる事が多かった。そのため必然的に箸を使う食事になってしまい、苦戦した。

俺も東洋系の血が混じっているがなかなかうまく使いこなせなかった。よく日本人はアレで食事ができるな。

「そうだな」とハンバーガーを一口頬張り相槌した。

「この食堂が出すハンバーガーはうまい。」

はさんである肉は厚く、レタスは新鮮。パンもぱさぱさでなくもっちりとしていて弾力がある。とくにピクルス。程よい酸味で食が進む。いくらでも食べれそうなハンバーガーだな。

「失礼。君がユウヤ・キサラギか？」

ハンバーガーを堪能していると声を掛けられた。

振り向くとそこに居たのはクロエのような長い銀髪を後ろで一つに束ね、千冬にも似た鋭い眼差しはまるで武人のもの。スラリとした肢体は程よく鍛え上げられ、灰色のパンツスーツを着こなした女性が立っていた。おそらく教員だと思うが……どこかで……会ったことがある様な……

俺が怪訝そうにしていると、

「私はどれほど月日が経とうが、姿が変わろうが共にア・バオワ・クーを防衛しジオンの精神を形としたMA《ノイエ・ジール》をアクシズより届けてくれた友を一日たりとも忘れたことはないぞ。まさか君は忘れたわけではあるまいな？」

女性は溜息交じりにそう言った。

ア・バオワ・クー?! 《ノイエ・ジール》?! アクシズ?! なんて俺たちが居た世界の事を知っているんだ? いや、待て。まさか……ありえるのかそんなことが?

「お、おま……」

俺は言葉を失い、

「え………えええ?! う、うそ?! なんで?!」

ユウキも目を細めていたが、気が付いたらしく逆に目を見開き大声を上げ、

「ユウキお姉ちゃん、この人だれ?」

「お二人はこの方を知っているのですか?」

一夏とクロエの二人も怪訝そうに尋ねてきた。

「ガ……ガトーなのか?」

恐る恐る答えた俺に、

「そうだ。君の友アナベル・ガトーだ。久しいなユウヤ!」

女性——アナベル・ガトーは笑いながら肯いた。

第八話 親友と戦友

東サイド

学園長室を出た私をちーちゃんは呼び止めた。二人だけで話がしたいらしい。ユー君たちには先に食堂に行ってもらい、私たち二人は邪魔が入らない屋上に移動した。

空はもう夕日で黄昏色に染まっていた。

「二人つきりでお話なんて……なにかなちーちゃん」

手すりに寄り添い、腰を掛けるとちーちゃんをまっすぐと見た。

「あの二人の事だ。キサラギ兄妹は何者だ？ なぜお前と行動を共にしている？」

「なんて説明したらいいかな……。ユー君とユーちゃんはいつちゃんとクーちゃんが山の中で助けた未来人かな？」

「ふざけるな。真面目に答えろ」

「こっちは大真面目なんだよ。」

「でも、今のところ害はないよ。ISを使わせたらちーちゃんでも苦労すると思うけどね。そんなことより本当に訊きたいことがあるんじゃない？」

「ふふふ、と悪戯めいて笑うとちーちゃんの表情は一瞬揺らいだ。」

相変わらず分かり易いな。

大方いっちゃんの事だと思っけど。

「……………その……………一夏の容体はどうだ？」

ほらね。

「良くなつたよ。三年前よりはね……………まだいっちゃんと話すのは怖い？」

「……………わたしは姉として、家族として一夏を守つてやれなかつた。今更、どういう顔をして会えばいいんだ？　なんて言つてやればいいんだ？」

「お帰り、ごめんねつて言えばいいんじゃない？　いっちゃんも三年前の傷を乗り越えて前に進んでるんだよ。私たちが前に進まないんじゃないよ。そうだよね？」

「……………束」

そう。前に進まなきゃいけない。困難を避けて通つても絶対に前になんか進むことなんてできない。

六年前の私がそうだったように。ちーちゃんには……………親友には絶対にそうなつてほしくない！

「だから、勇気を持つて一歩前に出よ？　いっちゃんが進んだようにさ」

「……………そうだな。ありがとう束」

「なら早くいっちゃんの所に行こう？　束さんは腹ペコなのだよちーちゃん♪」

手すりから降りて、ちーちゃんの手を引き二人で屋上を出た。

その時に、ふと考えた。

私はどうなのだろうと。

偉そうに言ってしまったけど、私は……箒ちゃんと家族に謝ることはできるのかな

……………。

ユウキサイド

開いた口がふさがらないってこんな時の事を言うんだよね。

目の前に悠然と佇む女性は……アナベル・ガトーと名乗った。

僕たち兄妹はその人を知っている。

アナベル・ガトー。

宇宙要塞ソロモンを中心とした宙域で活動していた元ジオン公国軍大尉。終戦末期のソロモン戦では撤退する味方のしんがりを務め、追撃した連邦軍部隊に多大な損害を与えたエースパイロットでありその時に「ソロモンの悪夢」と二つ名が付き、後の連邦軍兵士に恐れられた歴戦の戦士。

ア・バオワ・クー戦で一緒に戦ったけど、流れ弾が当たり損傷したゲルググを近くのグワジンに着艦してから会うことはなかった。その三年後のエギーユ・デラーズ大佐――その時は中将――が起こした星の屑作戦でアクシズからせめてもの助力として贈ら

れたMA《ノイエ・ジール》の整備兵として兄さんに随伴した時に再会した。その時階級は少佐になっていた。

《ノイエ・ジール》を受諾し作戦の最終目的、コロニーを地球に落下させるために出撃して戻ってこなかった。

ガトー少佐とは兄さんの方が親しかった。僕はどうもその人は苦手だった。自身の美学に反するものは嫌悪していたし、初め会ったときから……なんか怖いんだよね。執念に憑りつかれたというか、そんな印象だった。

主義は違うけど祖国と独立を願う想いに共感したとか兄さん言ってたつけ。今思うとアクシズに亡命してから月にちよくちよく行っていたのはその為なのかな。

「本当に……ガトーなのか？」

「くどいぞユウヤ。しかし、このような女々しい姿になっていたらあれば疑うほかあるまい。だが、わたしは紛れなく君が知っているアナベル・ガトーで間違いない」

兄さんを見つめる瞳は強く、纏っている気迫は紛れもなくアナベル・ガトーその人と僕は感じた。

ただ……

「いや……俺が知っているガトーは男だぞ?!」

兄さんはもちろん僕も何度言われようと信じられなかった。だってあの人は男だから

ら。

「……ぬう。その一点に関しては——ええい、ここでは人目が付く。ユウキ少尉。しばし兄を借りるぞで」

ガトー少佐？の鋭い眼差しが僕に向けられた。

気が付けば僕たちの周りは夕食を食べに来た生徒たちの視線を集めていた。その殆どがガトー少佐と兄さんだと思う。

「あ、はい。どうぞで」

「ちよ……おまつー！」

「妹の許可は得た。いくぞユウヤ」

困惑する兄さんを引っ張ってガトー少佐？は食堂を出て行った。

あんな怖い形相で言いわれたら断ることなんてできないよ。

「結局あの人誰なの？」

「うくん……兄さんの戦友かな」

ユウヤサイド

「()ならいいだろう」

アナベル・ガトーと名乗る女は俺を人気のない中庭まで強引に連れてきた。辺りはすっかり暗く、設置されたライトがうつすらと中庭を照らしている。

あらためてガトーと名乗る女に目を馳せた。

見た目は二十代前半。長い銀髪を一つに束ねているところまでは記憶のガトーと一致する、が……190くらいあった背は170くらいまでなり、適度に鍛え上げられた身体は、スラリとしていて美しいボディラインを描いている。

目つきは変わらず、鋭く威圧的だが顔は整い確実に美人の部類に入るだろう。

そして何より、胸の膨らみがある。たぶん、ユウキよりあるな。

俺が知っているアイツは男のはず……なのになぜ、こんなにも懐かしと感じるんだ？

「……本当にガトーなのか？」

何度目になるか分からない質問を問いかける。

正直同姓同名の他人か、アイツに妹が居ればこんな女性だろうと思うほど、俺は半ば疑っていた。

「疑うのも無理はない。大破した《ノイエ・ジュール》と残存部隊で連邦艦隊に特攻し、サラムス級宇宙巡洋艦に体当たりをしたところでわたしの記憶は途切れ、気が付けばドイツのベルリンに女子として生まれ、今まで育ってきた」

「……………」

どこことなく悲しみを帯びながらガトーは続けた。

「世界には地球連邦がなく、コロニーもなく、人類は宇宙に往かず、地球の恩恵を得て生

活をしている。コロニーで生まれ育ったわたしに想像もつかない裕福な暮らしをした。初めは夢かと思った。しかし、多くの戦友が、同志が、あの宇宙に散っていったことの実実は夢幻でなく、現実の出来事であったはずだ。姿が変わろうとわたしはジオン公国軍軍人アナベル・ガトーだ！ それだけは信じてもらいたい」

気迫に満ち溢れたその双眸は、紛れもなく本人であることを語っている。だからなのだろう、身体が怒りで震えていた。

「お前が……友の……アナベル・ガトーなら答えてくれ。なぜ、戻ってこなかった……なぜ……生きて帰ってこなかった。言ったよな？ 勝利の盃を酌み交わそうって……答えろ！ アナベル・ガトーツ!!」

激情にまかせ叫んだ。十年前に俺はアクシズ先遣艦隊旗艦グワンザンでガトーの帰還を待った。コロニーは地球に落ち、星の屑作戦は成就した。なのに、収容できた人数の中にガトーは居なかった。アイツの部下であるカリウスは、なぜガトーが戻らなかったのかを語ることはしなかった。だからこそ答えてほしいんだ。

俺との約束を捨て、成したかったものは何かを。

「……一人の軍人として、武人として、男として、決着をつけなければならぬ相手が居たのだ……許してほしいとは思わない。君が望むなら、できる限りの贖罪をしよう」

「……後悔はしているのか？」

「無論ありはしない。わたしは終始一貫、あの日の事を後悔したことは微塵もない」
その声音に虚偽はない。

悠然とした姿は、俺の知る一人の武人であり、戦友であり、友である人物のもの。

ああ、間違いなくアナベル・ガトーだ。

「なら……いい。後悔してないならなにも言うことはない。君に再び出会えた運命に俺は感謝する。また会えて嬉しいよガトー」

「わたしもだ。ユウヤ」

ガトーは喜色満面の表情で笑い、俺の顔も同じように笑った。

十年間の柵が無くなり、すつと心が楽になった。

アウトサイド

カシャツカシャツ。

ユウヤとガトー、二人の戦士が感動の再開をした中、茂みから自前のカメラを構え一心にシャッターを切る者が居た。

IS学園一年生黛薫子。

部活で新聞部副部長を務める整備課のエースでガトーが担当するクラスの生徒でもある。

「はあく……まさかと思って後をつけたけど、ガトー先生にね……これは学園最大のス

クープ！ 見出しは『モンド・グロツソの悪夢と呼ばれた人にまさかの恋人!?!』うん。これにしよう！」

そうと決まれば長居は無用。

気づかれぬように茂みから退散する薫子2年生。

しかし、後日ガトー先生からこつ酷く指導されたことは言うまでもない。発行された学園新聞は予備のデータも含め全て跡形もなく処分され、1週間の部活動停止処分を言い渡された。

しかし、この時に盗撮された写真は一枚だけ、後にガトーの部屋に飾られていたとか。

第九話 再開の盃

ユウヤサイド

「……………朝か」

カーテンの隙間から差す日の光は、目に差すような痛みに近い感覚を与え、俺は目覚めた。

重たい瞼を擦りながらベッド代わりにしたソファから起き上がる。

ああ……………頭が重い。

昨日は遅くまでガトーと話しをしてしまったからか……………いや、酒のせいかな。

「わたしはこの世界は後世だと感じている。ユウヤ、君はいつ死んだのだ？」

「あれから十年後だ。死んだ、というより時を超えた……………詳しくはわからないんだ。許してくれ」

「いやいい。良ければ……………までの経緯を教えてくださいませんか？ わたしも星の屑完遂後の事を知りたかったところだ」

最初、俺は話すか迷ったが、

「少し長くなるぞ」

ガトーなら受けとめられる。友の屈強な精神を信じることにした。

「構わないさ。時間ならいくらでもある。どうせならわたしの部屋でしょう。あの時酌み交わせなかった盃を片手にゆつくりと語ってくれ」

「いいのか？ 学園内で」

「無論、飲酒は教員であらうと厳罰ものだ」

見つかつたららの話だがな、とガトーは微笑した。

念のため俺は、ユウキにはISのプライベート・チャンネルで連絡をした。

『実機試験は明日かもしれないんだからほどほどにね』

『わかつた』

『念を押すようだけど……ほどほどにね』

『ああ、わかつている』

通信を終え、小さく息をつく。

いちいちうるさいんだよ、まったく。

それから中庭からガトーの部屋に移動し、盃——ウイスキー——を飲みながら、ガトーが死に、その後どうなったかを知る限り語った。

星の屑作戦は、連邦軍政府にジオン残党軍の脅威を与えた。

しかし、それはジオン残党、スペースノイドとしてのさらなる悲劇の幕開けであった。地球連邦軍特別部隊ティターンズの結成。

連邦軍内部にジオン残党狩りを目的とし、アースノイドを中心とした少数精鋭の部隊を作り上げた。

ティターンズは日に日に肥大化し、いつしか連邦軍内部を掌握するまで強大な部隊、いや組織となった。

やがてスペースノイドに対する強引な弾圧も開始した。

その最たるものがUC0085・7月31日、サイド1・30バンチコロニーで起きた反連邦運動に対しG3ガスをコロニーに注入し住民を虐殺した事件。

後に30バンチ事件と呼ばれる虐殺劇である。

しかし、この事件によりスペースノイドは反連邦組織エウゴに集結。2年後のグリプス戦役への火種となった。

ユウキはデラーズ紛争が終結した時、何も言い残さずにアクシズから脱した。星の屑作戦最終目的のコロニー落としが、ユウキの心の不信感を決定的なものにしたのだろう。

そのさらに1年後、シャア・アズナブルとその時部下であったアンディ、リカルドの

両名が共に地球圏へ帰還した。

アクシズの影の指導者ハマーン・カーンはその時、すぐくへこんでいた。シャアとも親しかった俺は彼女の機嫌取りを2年間する破目になったのだから堪ったものではなかった。監視も兼ねてだが。

ここまでの事をガトーに話した。

意外、とまではいかなかったが、静かに目をつぶり、

「……そうか。星の屑は多くの同胞へを散らす契機にしてしまったのか………すまないユウヤ。君には苦汁の日々だっただろう」

小さく、消えそうな声音で呟いた。酒が入っていたこともあるのかその時の彼——いや彼女は弱弱しかった。

ジオン再建という義を掲げ、時代を駆け抜けた彼らは狂人として歴史に名を遺したことになる。

だが、俺は知っている。アイツが、アナベル・ガトーの信念は、理想はジオンとスペースノイドの独立の為に起こしたものだ。手段はどうあれ、俺は彼らに称賛の意を贈ろう。汚名を背負い、懸命に戦ってきた英雄の軌跡は誰にも否定することは許されないとなのだから。

「いいさ。それはあの世界のことだ、悔いても仕方ない。こうしてまた君に出会えた。

さつきも言ったがそれだけで俺はうれしんだガトー。またこうして友と酒を飲む事が出来ることで俺にとつて十分な贖罪になっているよ」

「そう言つてもらえると、わたしも楽になる」

それにもう終わったことなんだ。今更、悔やんでもしようがない。

それからさらに酒は進んだ頃、ガトーは唐突に自分の事を語り出した。

「生まれ変わり、女になろうとわたしは己の生き方を変える事は出来なかつた。少し前までドイツ軍に居たのだ。士官学校に入り、教育期間を終えたわたしはIS部隊に配属された。適正が高かつたらしい。MSに似た機動兵器を後世でも扱うことになるとは思つても見なかつたよ。わたしはそこで研鑽を重ね、技術を磨き、隊長の座まで上り詰めた」

だが、とガトーはグラスの酒を一気に飲み干し、叩き割るかのようにテーブルに荒々しく置いた。頬が薄い朱色に染まつている。

ガトーが酒に飲まれるなんて珍しいな。

「ISが登場し10年、世は女尊男卑。悪風のごとく蔓延した女性至高主義は、精明強幹な将官を退職に追い込み、ISが使えるだけで女が率先して優遇されていた。わたしは我慢ならなかつた。上官が、同僚が、男だからという一点で雑務与えられ日々苦しみ。女性士官の顔を窺いながら職務を全うしている。中には苦汁に耐え切れず、自殺する

者もいた。分別もつかない輩が我が物顔で私利私欲を貪り、横暴を行う。これが軍人のあるべき姿なのかユウヤ？」

「……………」

ここに来た時に出くわしたＩＳ委員会の部隊——エリーゼの顔が頭を過った。

女尊男卑は想像以上に世界に蔓延しているらしい。

「わたしは彼女らが連邦の様に見えてしまった。腐敗しきった地球連邦にだ！ その時わたしは悟ったのだ。世に蔓延する女尊男卑、女性至高主義を撲滅し、再び平等な世界にしなければならぬ。これは生まれ変わったわたしに与えられた天命なのだ」と

「それがなんでここに居る理由なんだ？」

「……………3年前、わたしはドイツ代表の地位を勝ち取り、ＩＳの世界大会——モンド・グロツソに出場した。各国の代表を打ち破り、決勝まで勝ち進んだ。大会に優勝し、世に根付いた過ちを問おうとしたのだ。しかし、決勝の相手……織斑千冬に辛くも敗北を喫してしまった。それから一年後、ＩＳ学園から教師をしないかと轡木学園長から勧誘されたのだ。貴女のような実直で清き精神の人物がいまのＩＳ学園にはほしい、と言われわたしは快く承諾した」

ガトーは酔いのせいかうつつらうつつらしながらジャケットを脱ぎ、ブラウスの首元のボタンを外した。

……おいおい。胸元が見えるぞ。

「……前世は……デラーズ閣下がわたしを導いてくれた。

だから後世では……わたしが光に……彼の英霊が示してくれた光になればとその時思い至つたのだ。広くものを見る……いまの世代がダメであったとしても、これからの時代を作る世代の者たちを正しき道に向かわせる。その重責は軍人時代のそれよりも遥かに重い。しかし……やりがいはある。まだ……2年目の若輩ながら教え子を持ち、今では剣でなく教鞭を振るっているという……わけだ」

「どうだ？と言わんばかりにガトー微笑む。

人は変わっていきける。誰が言つたか忘れたが、目の前に居る友を見て確信し、心の片隅に小さな不安が滲み出た。

……俺は変われるのだから。

「……そうだったのか。変わったなガトー。前の君なら、こんな事はしなかった。力でねじ伏せ、目的の為なら手段を択ばない。どんなに自分が汚れようが信念に従い、流星の様に駆けぬけた君が、いまでは人を導く明光だ。俺は君が友であることが誇らしいよ」

驚いたように目を見開いたが、次第に穏やかな笑みをした。

「ふふふ……そうか。君から見て……わたしは……そう……みえ……」

事切れたようにガトーはテーブルに崩れた。

「おい、ガトー」

「……………」

軽く揺するが寝息をするだけで反応がない。

酒に飲まれ寝てしまうアイツ見たのは初めて見た。

やれやれ。友を放つて先に寝るやつがあるかよ。まったく。

俺はテーブルに突つ伏すガトーの左腕を上げ、肩を入れて立ち上がらせる。

かるっ?!

いやまあ、女だから当たり前か……

「……………」

このままベッドに投げ込むのも気が引けるな。

……………しようがないか。

「よっ」と

左手で足に入れ、すくい上げるように持ち上げる。

……………俗に言う、お姫様抱っこ。

「……………」

「……………う……………ん」

抱き上げているのが美人ではあるが、記憶の中のガトーといまのガトーを重ねるとなるとも複雑な気分になる中、ベッドまで運ぶ。

途中、はだけたブラウスの間から豊かな胸が……

「……………」

見なかった。うん。俺はなにも見ていない。

香水のような甘い香りも気のせいだ。

ああ、酔っている。俺も久しぶりに友と酒が飲めたもんで、羽目を外しすぎたんだ。

ガトーもそうだ。

明日は十中八九実機試験だ。早く寝ないと。

ガトーをベッドに寝かせ終えた時、重大な失態に気が付いた。

……部屋どこだろう。

荷物は束のロケットに置いてきしまった。

部屋は確か、千冬が案内してくれはずだった。

時計は11時を回ったところ。

いま部屋を後にしたら確実に不審者だと思われ補導されかねない。

酒も入っているし、なによりガトーに迷惑を掛けるわけにもいかないか。

俺は仕方なく空いていたソファアをベッドにして眠った。

「……シャワーでも浴びるか」

どうも気分がすぐれない。仕方がなく俺はバスルームに足を運ぶ。

昔からそうだが、俺は朝が弱い。いくつになってもだ。酒が入ると尚更だ。

Tシャツとズボン、下着を脱ぎさる。

「……………」

バスルームの前に立つと、なにか重要なことを忘れているような気がするが……………いや気のせいだろう。

早く、浴びてしまおう。

扉を開けると――

「ん？」

「……………あ」

一糸纏わぬ、ガトーが目に飛び込んできた。

頭のたるさと眠気が一蹴され、背筋が一気に凍りつく。

そうだ、ここはアイツの部屋じゃないか！

なんで自分の部屋だと思ったんだ!!

「……いや……その」

「……………」

お互い石になったかのように固まり動かない。

その間ガトーの裸体をもろに直視してしまった。

一つに束ねてあつた銀髪は解かれ、シャワーの水滴は身体のラインをなぞる様に滑り落ちていく。

運んだ時もそうだが、胸はそれなりにある。

濡れた髪、身体、シャワーの熱湯でなのか薄い朱色になった白磁のような白い肌、シャワーの香りは俺の思考を停止させ、何よりあまりの美しさに声が出なかつた。

「……すまんっ!!」

我に返り、扉を勢いよく閉めると、急いで脱いだ衣服を着なおした。

「……………」

椅子に座り頭を抱え込む。

……俺が……ガトーに見惚れていた？

……うあああああああつ!!

なに考えているんだ?!

アイツは男だぞ?

あ、いまは女か。

いや、さて……あいつ友で戦友で……同志で……だから異性としては……。

ああ、頭がごちゃごちゃしてきた。

「いや……ちがうんだ……そうじゃない……ガトーは友で……」

「……何をぶつぶつ言っている」

いつの間にかバスルームから出てきたガトー。

俺はまともに顔を見られずに俯いたまま、

「その……すまん」

謝ることが精一杯であった。

クロエの時もそうだが、なんでこんな時にニュータイプ的な危機感知能力が発動しないのか恨めしい。やはり……能力が低いせいなのか。

「……はあ。君とわたしとの仲だ。今更裸体の一つ見られたところで動じはしない。どうせ不注意なのだろう？」

「そうです」

「ならいい。これから気をつければいいことだ。さあ、もう顔を上げろ。男がいつまでも下を向いているな」

ゆつくりと顔を上げると、バスタオルを巻き、まだ乾ききっていない髪は水分を含ん

でいるのか朝日があたりキラキラと輝いていた。

「……………」

「……着替えをするから後ろを向いてくれると助かるのだが？」

「あ……すみません」

急いで後ろを向いた。

ガトーは動じていないと言っていたが……嘘だなたぶん。

若干、顔が赤くなっていたし。

いや、たぶん熱気で赤くなっていたんだ。うん。そうに違いない。

なんでこんな時だけニュータイプの的なものが働くのだろうか。

「ユウヤ……昨夜聞けなかったことがあった。お前といた銀髪の少女に関してだ」

着替えながらガトーは訊いてきた。

クロエの事か？

「クロエがどうした？」

「いや……ドイツ軍に居た時、彼女に似た部下がいたものだからな。それだけのことだ

——もういいぞ」

振り返ると、いつものように銀髪を一つに束ね、スーツは昨日のグレーのパンツタイプでなく黒のスカートタイプにガトーは着替えていた。

「では、朝食を食べにいけないか」

「……ああ、そうだな」

部屋を出て昨晩夕食を食べた食堂に向かう中、まともにガトーの顔を見れなかったのは言うまでもない。

そしてISのプライベート・チャンネルを使えばよかったと、後の後に気が付いた。

第十話 実機試験開始

ユウキサイド

目が覚めてみると部屋に飾ってある時計は6時を差していた。

ベッドから出て固まった体を伸ばす。

うくん、よく寝むれたな。

体調はすこぶる良好だね。

「……………結局、兄さん帰ってこなかったな」

兄さんはガトー少佐に連れてかれてから戻るどころか再開の祝杯を上げに、ガトー少佐の部屋に向かってしまった。

昨晚、ISのプライベート・チャンネルで、

『ユウキ、これからガトーに部屋に飲みに行くから』

『はあ?』

『彼女は正真正銘アナベル・ガトーだった。姿が変わつてもな。再開ついでに色々話したいから行ってくるな』

淡々と自己完結したことを言われてもさすがの僕でも伝わらないよ。

え？結局の少佐だったの？あの人？あんなガチガチの長身で男だった人が、美人で凛々しくてスタイルもいいし……………後、胸も大きくて……………

「……………」

……………ああ、なんだろう。思い出したらムカムカしてきた。

『いいけど……………実機試験明日かもしれないからほどほどにね』

『わかった』

そう言う時ほど絶対分かってないよね。

『念を押すけど……………ほどほどにね』

『ああ、わかってる』

通信が終わる直前にため息が聞こえた。

うっわ、むかつく。人が心配して言っただけなのにその態度はなんですかね。

まったくもう。昔からそうなんだから。

いつも思うけど兄さんは気分屋だよね。後さき考えずに行動するところ。

……………僕が言えたわけじゃないけどさ。

そのすぐ後に東ちゃんと千冬さんが合流。

またちがう意味で食堂は大騒ぎになった。

ISの生みの親、天災とも呼ばれる人物がいきなり現れればそうなるよね。

でも、

「騒ぐな！」

と千冬さんの一言で静まり返った。

その時一夏ちゃんは小さく震えていた。

ただ声に驚いただけじゃない気がした。

うまくは言えないけど……恐怖と不安……なのか。

夕食を食べ終え、用意してもらった部屋に行く前に、ロケットに置いてきた荷物を取りに戻り、千冬さんに案内をしてもらった。

その時東ちゃんが、

「私が居てもうるさめんどいことになると思うからラボに帰るね☆ 四人ともがんばってね。バイバ〜イ♪」

行きに使ったにんじん型ロケットで飛び去って行った。

……自由な子だよね。

兄さんの荷物は僕の部屋に置いてある。盗まれることはないと思うけど、一樣に。

それより、千冬さんが居た時の一夏ちゃんは僕のそばを終始離れようとしなかった。会うのを避けているのは明確だけど……なんでだろう。

正門の前で、震えたのも気になるし。

……千冬さんとの間になにがあつたんだろうか。

コンコンコン。

「ん？」

思案していると扉をノックする音が聞こえた。

だれだろう？こんな朝に。

「はい、どなたですか？」

「おはようございます、一夏です」

訪ねてきたのは、今考えていた一夏ちゃんだった。

僕は鍵を外して扉を開けた。

「おはよう、一夏ちゃん。早いね」

「いつもこのくらいです。ユウヤさんは戻ってこなかったんですか？」

「うん……たぶん大丈夫だと思ふよ。ガトーしょ……さんと一緒なら」

「でも……ユウキお姉ちゃんたちって別の時代の人だよな？ 知ってる人なんているの

？」

「最もな一夏ちゃんの質問に僕はやや言葉を選びながら答えた。

「なんて言ったらいいかな……あの人は兄さんの友達なんだよ……僕たちの居た世

界だと男だったけど」

「え？」

ああ、キョトンとしてしまった。

女なのに男って言うのも変だよね。

「まあ、詳しくは兄さんに訊いてね」

「……うん」

曖昧に一夏ちゃんを頷かせた。

説明をするのが苦しくなった、というより僕自身よく分かってないから兄さんに丸投げすることにした。

「それよりどうしたの？」

「朝ごはんを食べに行こうと思って……」

「あれ？ クロエちゃんは？」

「……先に行つて席を取つてもらつてる」

なるほど、一人なのはそういうことね。

「りよ〜かい。すぐに着替えるから待つていてね」

僕は部屋に戻り、寝間着を脱いで持つてきた衣服を入れたカバンから着替えを取り出す。この世界に来た当時は衣服なんかパイロットスーツの下に来ていたTシャツと作業用のズボンしかなかった。

兄さんも似たようなもの。季節が冬だったから防寒着の役割は果たしてくれたけど、何日も着ていると衛生的にもよくないし、衣服の調達は優先事項であった。

けど、東ちゃんのラボは意外と人里近く、衣服や日用品などはすぐに手に入った。

街というより村と呼んだ方がいいような人口が少なく、過疎化が進んでいる地域みただった。ノーマルスーツを着て歩いても「最新の防寒着ですか?」とか言われる始末だった。お陰で助かったけど。

代金は東ちゃんが肩代わりしてくれた。

彼女は所持金を……軽く1000億以上所持していたのは驚きだ。

本人曰く、「ISのコア作ってやったらこんなにくれた。特に使い道ないからいいよ」だと。

いやいや、これだけもらえればいろいろ使い道あるでしょ!

驚くことに、これでもほんの一部で残りは隔離された家族に渡したらしい。

せめてもの償い……なんだよねきつと。

「……………」

「ユウキお姉ちゃん?」

「あ、うん。いまいくよ」

しまったしまった。一夏ちゃんを待たせているんだった。

急いでTシャツとジーンズを着て、部屋を出た。

「ユウキさん、一夏様こちらです」

食堂に入るとクロエちゃんの声が聞こえた。

6人程が座れる広めの席を確保していた。

「おはよう、クロエちゃん」

「おはようございます。ユウキさんは昨晚、御帰りにならなかったのですか？」

「そうなんだよ。まったくしょうがなんだから。帰ってきたら少しお灸を添えないとね」

「ユウキさんってなんかお母さんみたいだね」

「そうですね」

「どこか納得したように頷く二人。

まあ、今に始まったことじゃないし、父子家庭で育ったから、自然と兄さんの面倒と
いうか……そういうのには慣れてしまった。そのせいかよく兄さんにくつついて遊ん
だりしてたら、いつの間にか一人称が『僕』で定着しちゃったけど。

その所為か、士官学校時代は………ああ、思い出しただけで泣きたくなる。

「そ、それより二人とも朝食頼み行こうか」
「うん」

「わたしは最後にします。席が盗られてしまつてはいけませんから」
「わかつた。じゃあ、僕と一夏ちゃんが先に行くね」

クロエちゃんを残して二人で朝ごはんの食券を選びに行く。

昨日食べていてそうだけど、此処のごはんおいしいんだよね。

軍隊のごはんって必要最低限の栄養しかないし、味は兎も角、何より見た目がおいしそうに見えるだけマシだけど。

食べれるだけマシだけど。

「一夏ちゃんはなににする?」

「和食定食のB。ユウキお姉ちゃんは?」

「そうだね……ランチのAでいいかな」

食券を買つてカウンターに向おうとすると、

「ガトー先生、おはようございます!」

「おはよう」

「先生、おはよう」

「ああ、おはよう」

「ガトーしょ……じゃないガトー先生は生徒たちに挨拶を返しながら、食堂に入ってきた。その後ろを兄さんがとぼとぼと、どこか気まずそうな足取りで続く。

「ねえねえ、あの人誰？ 昨日も食堂に居たけど」

「知らないの?! あの後ガトー先生に中庭に連れてかれて、そのまま部屋に行って、さっき一緒に出てきたんだって!」

「ええ!! それって……二人はそういう関係ってことなの?!」

生徒たちはキヤーキヤーと年頃女の子特有の空間を作り出している。分からなくもないけどね。

「ん? どうしたユウヤ? 先ほどから顔色がよくないが」

「ああ、うん。気にしないでくれ」

ぐったりとしている兄さんを気遣うガトー先生。

たぶん、この雰囲気は精神的に受け付けられないんだろうね。

「おーい、兄さん」

助け舟を出すつもりで、兄さんに声を飛ばす。

「……おう」

僕に気が付き、返した言葉に覇気はない。

ノックアウト寸前のボクサーみたいにフラフラと近づいてくる姿はなんとも痛々し

い。

……きつとガトー先生との間にもなにかあつたんだよね。

「大丈夫？」

「……ダイジョウブだ……モンダイナイ」

兄さん……信用ないよその言葉。

「という訳だ。彼女は俺たちの知っているガトーだ」

半分回復した兄さんは昨晚、ガトー先生に連れてかれてからことを簡単に説明してもらった。

しかし、なかなか信じ難い内容だった。

転生……なのかなこれ。

「つまり、記憶はあるん……ですよねガトー先生」

「そういうことだ。改めて、久しいなユウキ少尉」

「はい……本当に」

本人を見れば見るほど信じ難い。だってこんな美人の人があの、ソロモンの悪夢って誰が信じるだよ！

「ＩＳ学園１年次のＩＳ教習官を受け持っているアナベル・ガトーだ。その二人もよろしく頼む」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「クロエ・クロニクルです」

「……………」

お互いに自己紹介すると、ガトー先生はクロエちゃんを凝視した。

え？なんで？

「一つ質問していいかな？」

「わたしにですか？」

「そうだ……ラウラ・ボーデヴィツヒという名に訊き覚えはないか？」

その名前を聞いたクロエちゃんは平静を装っていたようで、ほんの少し驚いたように体が小さく震えた。

「……知りません」

「そうか。容姿があまりにも似ていたのだな。てつきり親族だと思ったのだが——ん？もうこんな時間か」

食堂の時計は7時半を示していた。ガトー先生は朝食のトレイを持ち立ち上がった。

「わたしは準備などがあるので先に失礼する。ユウヤ、実機試験を楽しみにしているぞ」

そう言うとガトー先生は食堂を後にした。

「……ユウキ」

「……うん、訊かなくてもいいよ兄さん」

僕と兄さんは顔を見合わせながら、額に嫌な汗が滲み出していた。

……大変嫌な予感してきた。

ユウヤサイド

朝食を終えた俺たちは、それぞれの部屋に待機していた。

勝手にうろろうしてもいい身分でもないからな。

おそらく向こうから連絡があるだろう。

部屋の割り振りは、一夏とクロエ、俺とユウキになっている。

「……なあ、それなんだ？」

待ち時間、ユウキは工具を片手に何かを制作しているの訊いてみる。

ライトグリーンで球体のような何かをだ。

「これ？ これは『ハロ』っていうマスコットロボだよ」

「マスコットロボ？ そんなもの作ってどうするんだ？」

フフンと鼻を鳴らしながらユウキは『ハロ』を抱き上げた。

「ただのマスコットロボじゃないんだ。これは僕が独自に改造を施すことで簡単な会

話、データの記録、ハッキングなどができる高性能型なんだよ」

誇らしげに語るユウキ。ベッドに横になりながら呆れて溜息しか出ない。

いつもそうだが、ほんとうこういう時は水を得た魚のごとく生き生きしているよな。

「後それに……思い出の品でもあるしね」

ユウキは最後に小さく呟いた。

『ハロ』見つめるその姿はなんだかとても、照れくさそうにしているが、どこか寂しそうな風にも見て取れた。

それに思い出の品？

「……どういう意味だ？」

「な、なんでもない！ それより、いつになったら連絡が来るんだろうね」

「……さあな」

慌てながら話を逸らしたが、俺も追及する気はなく、それで終わりにした。静寂になった室内を『ハロ』を作る作業音の中、待つことさらに30分後。

コンコンコン。

「はい、どなたですか？」

『ハロ』と工具を置き、ユウキが扉越しに訊く。

俺もベッドから起き上がると扉まで行く。

「わたしだ。ガトーだ」

ユウキは扉を開けた。

ようやく来たか。

「実機試験の準備が整った。支度をしたまえ。準備が出来次第に第三アリーナに向かうぞ」

「……今更ですけど、ガトー先生も試験官ですか？」

「そうだ。轡木学園長からのお達しでな。わたしと山田先生が君たち4人の試験官として当たらせてもらう」

ガトーに案内され第三アリーナの管制室に来た。

そこには轡木滯学園長と織斑先生、眼鏡をしたやや小柄な女性に壮年の男性、一夏とクロエも即集められていた。

「集まったようだね。では、四名の実機試験を開始しようか」

「はい」

壮年の男性は滯学園長にそう促した。

格好は用務員の制服を着ているが、この人が。

「貴方が本当の学園長ですね」

「そう。わたしが本来の学園長轡木十蔵だ。この学園の経営を任せられているが、世だけにね。表は妻に任せているんだ。許してほしい」

「いえ、こちらこそ。無理な要望を聞き入れていただきありがとうございます」
差し伸べられた右手を握り返す。温和で友好的な人物のようだ。

「そちらの女性は？」

「彼女は山田麻耶先生。一年次の副担任だ」

「織斑先生のクラスで副担任をしています山田麻耶です」

ペーリと山田先生は頭を下げた。

優しそうな雰囲気だが、どこか大人びて見せようとしている雰囲気の女性だ。

彼女がガトーの言っていたもう一人の試験官か。

「実機試験に関してだが……ユウヤ君は専用機を所持しているときいているが、本当かね？」

「はい、そうです」

「ほかの3人も？」

「はい」

「ならこの試験は専用機で行ってもらいたいだ」

なるほど、入学は認めるが実機試験は受けてもらいう意味はそこか。

「データ採取をしておきたい訳ですか？」

「そういうことだ」

十蔵さんは頷いた。

「ISは各国にそれぞれ分配された数少ない現代最強の兵器。

ここでは各国のISが新技術の試験を行うところでもある。最低限の情報は我々も把握してなければいけない義務があるんだ。万が一、条約違反のシステムや装備があつては学園の安全と信用だけでなく、争いの火種になるからね」

「そうですね」

十蔵さんに同意しながらも、おいそれとデータを渡すわけにはいかない。

俺たちのISは基本性能が既存のISを遥かに勝る高性能機。材質と技術はこの世界に存在しない物を使用している。

もし、学園内部に居る産業スパイに盗まれもしたらそれこそ火種になる。

俺はユウキに目配りする。東が居ない以上、ISの機体データを管理しているのはユウキだ。

「いいですよ。それが義務なら仕方ありませんから」

そう言い、ユウキが首に掛けているユニコーンのネックレスが光り輝く。

光りは右手を包み込み、無機質な金属の腕に変えた。

「ちよつと失礼しますね」

右手からコードを伸ばし、管制室のコンピュータに接続した。

ディスプレイにデータのダウンロードゲージが現れ、数秒足らずにゲージは100%に達した。

「はい。四機分のISデータをこのコンピュータにインストールしておきました。どうぞ確認してください」

ユウキは右手の展開を解除して確認を促した。

「山田先生、確認を」

「わかりました」

織斑先生に指示され、山田先生は確認を始めた。

黙って見ていたが、大丈夫だろうか。

「大丈夫なのか？」

俺はユウキに小声で訊く。

「大丈夫。データがコピー、もしくは抜き出されたら数種類のウイルスに感染させて偽のデータになるよう細工してあるから」

なるほど。言わずとも分かっているか。さすが技術屋、こういうことは心得ている。

「はい……四機分の機体データを確認しました」

「なら、これで試験が始められるね」

「具体的にどういった内容ですか？」

「試験はそう難しいものじゃない。ISを使い、教員と模擬戦をしてもらおう。君たちがどれほどの技量を持っているか測らせてもらいたいんだ」

「操縦者自身のデータもほしいと」

「そういうことになるね」

十蔵さんの説明に不審な点はないが、裏はありそうだな。

だが、いまは詮索したとしても意味がないことだ。

「分かりました。それで構いません」

「では、試験官の選抜はどうするかね？」

「ここはやはり、皆の意見を聞くべきだな。」

「俺はガトー先生を選びます。ユウキは？」

「じゃあ、僕も同じで」

「クロエと一夏はどうする？」

「わたしは……初めてだから……その……強くない人で」

やや臆しているのか一夏は小声で言う。

初の操縦が模擬戦だからだろう。

「なら、山田先生がいいだろう」

「……………っ！」

小さく縮こまった一夏は千冬を見て小さく目を見開いた。

「ガトー先生は前大会ドイツの代表だ。初操縦なら荷は重い。なら、代表候補生だった山田先生の方が、気は楽だろう」

「……………」

「それにこれは合格が決まった試験だ。負けてもいい。自身の全力持ってやれ、一夏」
優しそうに目を細めて言うが、一夏は顔を逸らした。

「……………山田先生に……………します」

そう言い、ユウキの傍までやってくると服の袖を握りしめ、その姿を見つめる千冬の瞳には悲しみに溢れている。

二人の間の空気は重く、まるで見えない深い谷があるように思えた。

「クロエはどうする？」

「山田先生でお願いします。一夏様のお傍を離れるわけにはいきませんから」

「分かった」

これで決まりだな。俺とユウキはガトーに。一夏とクロエは山田先生と模擬戦をす

ることになった。

「決めたなら早速始めよう。時間は限られてるからね。まず先にガトー先生の二人。後に山田先生の二人を交代で行いましょう」

「分かりました。ではわたしはピット方に向かいます」

「お願いします、ガトー先生」

「はい。では二名はわたしについてこい」

ガトーの後を俺とユウキは続き、管制室を出ようとするが一夏はユウキの袖を離そうとしない。

「……………一夏ちゃん？」

「……………」

ギユツと力強く握りしめ、無言を貫き一夏はユウキを制止させた。

ここから居なくならないで——そう語っているように一夏の瞳は震えていた。

ユウキは震える瞳を見つめ、一夏の頭を優しく撫でながら語りかけた。

「大丈夫だよ一夏ちゃん。ちよつと行ってくるだけだから、ね？」

「……………うん」

名残惜しそうだが一夏は握りしめた袖を放し、少し強張りながら笑顔を見せた。

「ユウキお姉ちゃんにユウヤさん頑張つてね」

「うん」

「ああ」

俺とユウキは答え、ガトーの後を追い管制室を出た。

第十一話 試験一戦目 ユウヤVSガトー

ユウキサイド

ガトー先生に案内され、入室した部屋は更衣室だった。数十のロッカーがびっしりと並び、ベンチがあり、観戦用のモニターまで備わっている。

「まずはISスーツに着替え、隣のピットに往くぞ」

「了解」

「わかりました」

目に付いたロッカーを開ける。

着替えるといつても部屋の方で既に着てきているから、後は服を脱ぎさるだけ。

さつとTシャツとジーンズを脱ぎ、ロッカーの中に押しやる。

僕のISスーツは着用していたノーマルスーツの色にあやかった青色にした。

兄さんは僕とガトー先生の反対側、一列向かい側のロッカーにした。

多分気を使っただと思う……僕の隣の人に。

「……………」

ロッカーにあるハンガーに黒のジャケットを掛け、ブラウスのボタンを外すと胸が露

わになる。

「ん？ どうしたのだユウキ少尉？」

「いえ、別に。あと、もう少尉じゃないです」

怪訝そうにガトー先生は訊いてきたが、素っ気なく返した。

僕の視線は胸の二つの大きなものに喰いついている。

「そうか。なら……ユウキと呼んでいいか？」

「どうぞで」

やっぱり素っ気なく返す。視線はそのまま。

別に羨ましいわけではない。そう、断じて羨ましいわけではないんだ。

「しかし、いつも思うのだがこのスーツは少しばかり窮屈に感じるな」

ブチッ。

ISスーツを着込むときにガトー先生が何気なく発したそれで、僕の中の何か切れた。

「特に——」

「胸ですか？ 胸ですよね？ おっぱいですよね！」

「う、うむ。そうだが……」

うがあああああつ!! むかつくつ!! 腹立つつ!! そして何より羨ましいつ!! ど

うせ動き辛いというんでしょ!! こんなものない方がいいって言うんでしょ!! なにより許せないのが、知っている人が生まれ変わって自分より胸大きくなっていること、理不尽なことだよ!!

「あ……あははは……こんな事実……僕は認めない」

「わ、わたしはISの準備あるので先に行っているぞ」

遠い目をしているとガトー先生は着替え終え、逃げるように更衣室からピットの方に行ってしまった。

「フフフ……」

「ユ、ユウキ? どうしたんだ?」

着替え終えた兄さんは顔を青くしている。

「ナンデモナイ。ウン、ナンデモナイヨ」

「お、おう。じゃ先にいくな」

兄さんはやや引きながら、逃げるようにピットに向かった。
オカシイナ、ボクハイツモドウリナノニナ。

ユウヤサイド

更衣室からピットに逃げる。いまのユウキはヤバい。

本能的に危機を感じるほどのどす黒い何かを纏っていた。

あの状態のアイツには手を出さない方がいい。

昔からの教訓だ。

切れたユウキに近づくな、だ。

「来たか」

「いや、まだユウキが……」

「……そうだな」

ガトーは察したように頷く。数分してユウキがピットに入ってきた。

「ごめんなさい。遅くなりました」

普段道理になっっているユウキを見て二人して安堵の息を漏らす。

「では、試験を始める。どちらが先に行く？」

「なら俺からやろう」

「いいだろう。ユウキ、君は更衣室に待機してくれ。モニターで観戦ができるぞ」

「お構いなく、ここで待っています。すぐに終わると思うんで」

ユウキの自信を含んだ言いように、ほうっとガトーは不敵に微笑した。

「それならいいだろう。しかし、一つだけ言っておく。ISとMSでは違うということ

をわたしが教授しよう」

ガトーは踵を返すと、用意していた二機の I S に向かった。

機種は I S 委員会も扱っていた《ラファール・リヴァイヴ》と《打鉄》だ。

この学園でも扱うということは汎用性と操作性に優れた I S なのだろう。

ガトーは展開待機状態の《打鉄》に乗り込んだ。

その姿は、古い歴史書に載っていたサムライを沸騰させる。

「さあ、ユウヤ。君の I S を出したまえ」

「ああ」

促されるまでもない。俺は《ネオサイコ・ドーガ》を起動。

光が全身を包み、ワインレッドの全身装甲を展開する。

「なんと神々しい I S……すばらしい」

そういうと思ったよ。

「まあな。開発者はユウキと束だからな」

「なるほど。天災と君の妹の合作。俄然楽しみだ」

さらに深く笑むとガトーは《打鉄》をカタパルトシャフトに乗せ、固定する。

呼応するようにピットゲートが開かれた。

「先に行っているぞ」

カタパルトシャフトが高速で流れ《打鉄》をアリーナへ射出した。俺も同じくカタパルトに乗せようとしたが、足がデカすぎって乗せられない。

「ゼータならこのカタパルトは使えそうだけど、《ネオサイコ・ドーガ》はデカいから無理だね」

ユウキは苦笑する。

まあ、確かに重ISって言う部類だろうな。あるか分からんが。

仕方なく《ネオサイコ・ドーガ》を浮遊させる。

「じゃあ、行ってくる」

「うん、がんばって兄さん」

手を軽く上げ、バインダー内部のスラスターを噴かし、アリーナに飛び込んだ。アリーナ内部は縦横ともに広い。ISでなく、MSでもここなら限定的だが模擬戦をする事が出来るな。

ガトーの《打鉄》はアリーナの中心あたりで滞空している。

《ネオサイコ・ドーガ》をガトーと十メートルくらいまで近づかせた。

「只今から実機試験を開始します。両名、準備はよろしいですか？」

「……………」

「……………」

アリーナ内部のスピーカーから山田先生の声が響き、俺とガトーは無言で答えた。お互いに臨戦態勢に入っているのだ。

「では、模擬戦開始です！」

ビーツ!!

ブザーと同時に俺はメガ・ビームライフルとシールドを展開。

後方に移動しながら照準をガトーに定めトリガーを絞る。

十数メートルからの近距離射撃をガトーは最小限の身の動きで躲した。

さすがに当たってはくれないか。

「アナベル・ガトー——参る!!」

ガトーは近接ブレード展開し《打鉄》が驚異的な速度で猛進してくる。

その速度はIS委員会の奴らより数段速い。

「くっそ!!」

二発目を放つが、やはり最小限の機動で躲される。

加え、射線を外すように小刻みに動きながら距離を詰めてくる為、オートの照準が合わせる事が出来ない。ハイ・ビームライフルは遠距離の武装だ。一発の威力と引き換えに次発までのタイムラグが長くエネルギー消費も激しい。俺はガトーとの一定の距離を保ちつつ、ハイ・ビームライフルを牽制し続ける。

「甘いっ！ その程度の射撃でわたしを止められると思うな!!」

なおも速度を緩めないガトーに心臓の鼓動は速く、ひしひしとしたプレッシャーが息苦しさを促す。その時《ネオサイコ・ドーガ》がアリーナのシールド接近警報を発する。

「ツ!!」

アリーナのシールドすれすれをなぞるように飛行する。

刹那、バインダー上のファネルポットから二機のファネルが飛び出した。

サイコミュが危機感を察知してファネルをガトー目がけて突貫させたのだ。

「なにっ?! 無線誘導兵器か!」

ファネルのビーム射撃にガトーは回避機動をする。

機動力の乏しい《打鉄》で最小の動きでビームを躲し、肩部のシールドで防ぐ。

ハイ・ビームライフルでファネルのビームを躲したところを狙撃する。回避行動を終えた直後は避けることは不可能のはずだ。

バンツ!!

命中する寸前、爆発的な音と共にガトーの《打鉄》は弾かれるように後方に加速、ビームはガトーの眼前を通り過ぎた。

なんだいまのは?!

「ちい!」

ファンネルをさらに二機を飛ばすが、ガトーの接近を抑制させるので精一杯だ。
「行くぞユウヤツ!!」

ガトーはアリーナいっばいに高度を上げ、急降下する。
バンツ!

再び爆発音が轟き、《打鉄》が加速する。

追従するファンネルを振り切り、一直線に向かってくる。

「うおおおおおっ!」

保持しているブレードを振りかぶる。俺はシールドを掲げ身構える。

「ぐっ!!」

甲高い金属音が鼓膜に突き刺さる。

打ちつけられた衝撃が凄まじく左手を押し込まれそうになる。

なんて重い一撃だ!

「なんとという強度! 傷も付かぬか?!」

速度とISのパワーを利かせた一撃は重いがシールドの装甲を破損させるまでには
いたらない。流石のガトーも驚きを隠せないようだ。

「ぬう!」

楯越しにハイ・ビームライフの銃口をガトーに向ける。

この距離なら避けるすべはない。

「墮ちろー！」

銃口に収縮される光。ガトーは《打鉄》の左肩のシールドを銃口に押し当てた。

「なっ?!」

ビームはシールドを貫通するが、ガトーを捉えず通過した。

シールドを目隠しに使いビームが貫く瞬間、シールドでハイ・ビームライフルの銃口を僅かに逸らし、身体を後ろに傾け避けきったのだ。

そして流れるかのような動きで右回転。ブレードの切り上げがハイ・ビームライフルを手から弾き飛ばした。

ビーム・アックスを掴もうとするが、強烈な蹴りがシールドの上から叩きこまれ、吹き飛ばされる。機体のダメージはないが衝撃が体を軋ませる。

くっそ……ここまで肉体にくるのか。

「はああああっ!!」

体勢を立て直す間もなくガトーの刃はすぐそこまで迫る。

「うおおああっ!」

叫びシールドから素早くビーム・アックスを振り抜いた。交差したブレードは熱で赤化していき、数秒足らずで断ち切れた。

「ブレードが?!」

返すビーム・アックスの斬撃を見切り難なく後退する。

「はあ……はあ……」

息が荒く自分から踏み込む事を体が拒む。

ガトーの言ったMSとISの違い。それは生身の肉体を使った戦いだ。

操作一つでMSは腕、足を動かすが、ISその動作は自身の肉体。

つまり、MS以上に体の疲労がくる。

「どうした? もう終わりかユウヤ?」

悠然と空中に佇む姿が目映る。

あれだけの機動と戦闘をしているのにガトーは汗一つ掻かず、新たなブレードを呼び出し、右手に持つ。

「まだだ!」

ビーム・アックスを左右の手に持ち、シールドを捨てスラスターを全開で突貫する。

滞空しているファンネル四機に加え、残りの六機を含む全機をガトーに突っ込ませる。

「意気込はよし! ならこちらも全力を持っていく!」

さらにブレードを一本呼び出し、先行したファンネル十機の放火を絶妙な機体操作と

爆発的な加速で回避しながらガトーも距離を詰めてくる。

相対距離は徐々に縮まり、

「うおおおおお！」

「はあああああ！」

ぶつかると寸前にお互いの得物を振るう。

《打鉄》のブレードは実体剣。ビーム・アックスの出力なら易々と溶断できる。そのことをアイツは分かった上で正面から来るのか？

「っ!？」

ビーム・アックスと《打鉄》のブレードが交差するが溶断されない。《打鉄》のブレードは振り下された左右のビーム・アックスの柄の部分で交差している。高速機動でこんな芸当をやつてのけるのかよ?!

「まだあああ！」

罅迫り合いの中、腰部にある隠し腕を起動。スカートアーマー内に収納してあるビーム・サーベルを握り、ガトーの懐を薙ぎ払う。

「なに?!」

ビーム・サーベルは《打鉄》の腰部の装甲を破壊した。

ガトーの顔は苦悶に歪み、受け止める力が緩んだ。ここで一気に押し込む!

「うおおおおおっ!!」

「くうううううっ!」

隠し腕のビーム・サーベルを返すように振るうが、左足の蹴りを当て防ぎ、上体を後ろに捻ることでビーム・アックスをいなし、《ネオサイコ・ドーガ》の肩部を蹴り飛び引いた。

「不覚……そのような機能が内蔵されているとは」

「……はあ……だろ」

お互いに距離を置く。ビーム・サーベルの斬撃を受け、シールドエネルギーは減少しているはずなのに追い込まれているのはこっちだと錯覚してしまう。滞空中のファンネルは内蔵エネルギーが無いことを知らせる表示がバイザーに出ている。ファンネルを呼び戻してバインダー上のファンネルポッドに回収する。

「しかし、無線誘導兵器をあれほどまでに操れるとは感服した」

「その割には易々と躲していたように見えたが……」

「ふふ、入学試験で似たような者を相手にしたのでな。彼女と似た機体性であったためにできた戦術だ。無線誘導兵器の操作技量も君の方が数段上だよ」

そう評価してくれるのはいいが、正直自信を無くすぞ。

「どうする? まだ続けられるのかユウヤ?」

「当然っ!」

ガトーの問いに答え、ビーム・アックスの柄どうしを連結。ナギナタを形成する。

「勝負はここからだろ? ガトーッ!」

ビーム刃を発生して突っ込む。近接格闘戦ではガトーが有利だろう。

だが、《ネオサイコ・ドーガ》のガンダニウム装甲の防御力という最大のアドバンテージがこちらにはある。

守りを捨て、攻勢に転じるしかない。

「……ッ!」

攻めに攻め、徐々にガトーを押しはじめるが決定打を与えることができない。すべてを見切るように紙一重で光刃を避ける。

その都度ブレードでのカウンターを受けるが、ISにダメージはない。

だが、なんだこの胸を過る不穏な感じは?

「なるほど、確かに強固ではあるが……」

ガギイインッ!

ブレードの振り下ろしが右肩の装甲を捉えた。

「つがぁ?!」

刹那、鋭い痛みが右肩を電撃のように貫いた。

(右肩関節部被弾、シールドバリアー部分展開？ シールドエネルギー減少?!)

バイザーに表示されることに戦慄する。

「やはり関節は他より強度は低いようだな」

ガトーの顔がほころぶ。数十にわたるガトーの剣戟は《ネオサイコ・ドーガ》の絶对的なアドバンテージをやすやすと看破して見せた。

本当に俺の知るガトーなのか……いまの彼女は前世のアイツを人間として上回っている。

「ではいくぞっ！」

ガトーが来る。《打鉄》のスラスタを全開にし両手にブレードを携え。振るわれるブレードは的確に関節部を狙う。

バイザーに被弾箇所を知らせるアラート、シールドエネルギー減少の表示が鳴り響き続ける。

「……ッ！」

斬撃を絶え間なく打ち込まれ被弾しながら後退することしかできない。

「ファンネルッ！」

ファンネルのエネルギー補充完了数は四機。ファンネルポットから四機全てを射出する。

「少しでも機動の妨害と攻撃の隙を作らないとジリジリとシールドエネルギーを削られる。」

「その兵器は見切っているぞっ!!」

ファンネルが四方からビームを浴びせるが、《打鉄》を捉えることはできない。嘘だろ?! ファンネルの軌道を読まれている?!

「はっ!」

僅かな動揺がファンネルの機動を鈍らせ、一つがブレードに切り伏せられ四散した。容量を得たのかガトーは二つ、三つ、四つとファンネルを次々に切り裂いた。

「……………」

驚愕を飛び越え啞然とする。これがガトーの実力……

「……………っ! しまつ」

「遅いつ!」

その僅かな静止は戦闘での死を意味する。

疾風の如く迫りきたガトーは二本のブレードを振り上げ、バイザーの上から叩き落された。

鈍器で叩かれたような重い剣戟に耐えることができず真下に墜ち、地面に激突した。

「……………あ……………つく」

「どうだ……これがI S戦だ」

I Sの補助システムで意識は失っていないが体は重たい。数メートル先に降り立ったガトーは見下ろしている。

「……までだなユウヤ。君の負けだ」

「……………」

唇を噛み締めた。

悔っていた。I S委員会との戦闘で容量を得た俺は年甲斐もなく慢心していた。

《ネオサイコ・ドーガ》なら勝てる。戦争をしたことのない連中に負けるはずがないと。相手はアナベル・ガトー。宇宙世紀の戦乱を駆けた抜けたやつを相手なのに悔つて勝てるようなレベルか？ 初めからなぜ全力でいかなかった？ 俺は……バカやろうだ。

「もうよせ。いまの君ではわたしは倒せん」

立ち上がりビーム・ナギナタを構える俺にガトーは諭す。

「忘れたのか？ 俺は負けず嫌いなんだよっ！」

突っ込んだ。全力の一撃をぶつけるようにビームナギナタを振りかぶる。

「ならば……」

ガトーは左右のブレードを地面に突き刺した。振り下ろされるビーム・ナギナタを紙一重に避けると伸びきった右手を掴み引き、背をその中に入れた。そして俺は空を仰い

でいた。

「……っあ」

ふわりとした浮遊感の後に背中が受けた衝撃で投げ飛ばされたのだと気付く。流れるよな体の動きをI Sで実践できる技量に感服してしまう。

「これならば認めるか？」

ガトーはビーム・ナギナタを持つ右手を踏みつけ剣先を向ける。仰向けのままではファンネルは出せない。ここまでだ。

「……俺の負けだ」

俺は絞り出すように言った。決着を告げるブザーがアリーナに響いた。

第十二話 試験二戦目 ユウキVSガトー

アウトサイド

「ガトー先生を相手に20分……すごいでね、彼は」

管制室のモニターで観戦していた十歳は感嘆していた。自身が戦闘教官としてスカウトしたアナベル・ガトーの実力は世界で五本の指に入る。第二回IS世界大会が初出場でありながら優勝候補のアメリカとイタリアを打ち負かし、初代ブリュンヒルデである織斑千冬と互角。その彼女と対峙した世界初の男性操縦者のユウキは四十分間持ちこたえたのだ。

「山田先生、表示されたデータは正しいんですよね？」

「は、はい。彼はISに操縦した時間は……五十分です」

なりよりクロエと一夏以外を驚かせたのが、ISに搭乗して1時間未満であることだ。

「五十分?! それだけの操縦時間でガトー先生を選んだのですか?」

「……IS委員会を一人で退かしたことはありませんね」

妻の滞から昨日IS委員会との概要は知らされていた。IS委員会のIS部隊は各

国から集められた優秀な人材ばかりで構成されている。その大半が代表候補性、I S 学園で優秀な成績を収めた者であり、自然と女性至高主義傾向の人間が多い場所でもある。昨日送り込まれた部隊は一五機の内、五機の《打鉄》は日本政府からの要請で出撃した自衛隊配備のI S 部隊ではあるが技術面においても遜色はない実力である。結果は……一五機中、ダメージレベルCが五機、Bが九機、一機が無傷と手痛いものであった。

（恐ろしいですね。彼らが脅威でなければいいのですが……）

十蔵は心中で呟いた。

一夏サイド

ユウヤさんが負けた。昨日、I S 委員会の人たちを寄せつけもしない強さだったユウヤさんが翻弄されていた。束さんとユウキお姉ちゃんが造ったI S を使っても勝てない相手。私だったらどうなのだろう。I S は今まで使ったことはない。初めてであんなに動かせるだろうか。

「……………」

左手に待機状態の《白零姫》の白いガントレットを見つめるけど、この子は何も言っ

てくれない。そうだねってしゃべられても困るけど、不思議と大丈夫って言った気がした。

「次は……ユウキさんですね」

「うん」

ガトー先生とユウキさんはピットに入っていった。次はユウキお姉ちゃんの番だ。

この試合だけは見逃せないと、モニターから目を離さないように集中する。

「……………」

千冬姉さんがそわそわしながらわたしを見ていたことに気付いた。

そして……ユウキお姉ちゃんがピットから出てきたのがモニターに映った時、睨んでいた。

ユウキサイド

兄さんとガトー先生が戻ってきたけど、僕は戦慄していた。

模擬戦の結果自体もそうだけど、なにより兄さんと《ネオサイコ・ドーガ》が満身創痍となっていることが僕自身、信じる事ができなかつた。

「兄さん大丈夫？」

「……………そう見えるか?」

座り込む兄さんは溜息交じりにつぶやく。うん、ごめん。

「ユウキ、準備して待っている。ISのシールドエネルギーを補給でき次第始めるぞ」

ガトー先生は疲れを感じさせない足取りで行ってしまった。あれだけ動いて疲労しないって……………化け物?

「油断するなよユウキ。ガトーは強い。想像以上にな」

「わかつてるよ」

兄さんが忠告してくれる。見ていて勝てる自信なんかないよ。

「あと一つ忠告しておくぞ」

「なに?」

「……………お前のIS、外見がガンダムタイプだろ? アイツはたぶん俺のときよりも凄味は増すぞ」

……………うわあ、聞かなきゃよかった。

「それと……………制圧力のある射撃武器を《ネオサイコ・ドーガ》に入れてくれ。ああも接近戦ばかりだと身が持たないからな」

確かに、体を使った技術は士官学校の時以来だしね。しょうがない作ってあげますか。

「……わかったよ。束ちゃんのラボから資材と機材は専用のISで持ってきているから合間を見て作っておくよ」

「なるべく早く頼む……ってIS二つも持ってたのかよ?！」

「正確にはISってとは言えないよ。一装甲とかスラストとかの展開する部分をすべて拡張領域《バススロット》にした収納箱かな。わざわざ束ちゃんのラボで製作して送ってもらうって手間かかるし、申し訳ないからね」

正直なところ《ネオサイコ・ドーガ》と《アサルト・ゼータ》は荒削りの原石に近いIS。二人で造ったみたいになってるけど、実際は束ちゃんの指導を受けながら僕なりに設計して作り上げたISだ。改良の余地はいくらでも出てくる。この実機試験だっ
ていいデータ集めになる。さすがにファンネルを四機を破壊されたことは想定外だ
けどね。

「その……《ネオサイコ・ドーガ》は大丈夫か? ファンネル四機潰されたが」
そんな心中を察したのか兄さんは不安げに訊いてくる。

ガンダ二ウムの残りも少ない。軽度の損傷はISの自己修復機能で賄えるけど破壊されればそれまでだ。

「多少はね。でもこれからはなるべく壊さないでよ。造るのも大変だから」

「……肝に免じておくよ」

ファンネルも消耗品だからな仕方ないか。まあいざとなれば、ばらして別のISを造ればいいかな。時間はかかるけど。

「待たせたな。ではユウキ、君のIS出したまえ」

補給を終え、ガトー先生が戻ってきた。兄さんとやる前にも沸々とした気迫は衰えていない。

「……はい」

意を決して《アサルト・ゼータ》を展開するとガトー先生は驚きで目を見開いた。

「なんと……ガンダムとはっ！」

今にも飛び掛かってきそうなほどのプレッシャーが溢れ出た。

この人にとってガンダムはある意味呪うべきものだ。浴びせられたプレッシャーで息が苦しくなる。

「落ち着けガトー。ユウキのISがガンダムだからってそう荒れるな」

兄さんがガトー先生を宥めるとすっとプレッシャーが弱まったが、背筋に冷たい感覚を僕は久しぶりに味わった。ほんとに勘弁してほしい。

「……………すまない。ガンダムは私にとっては因縁深い存在だからな。最後の相手もそうであつた」

昔を懐かしむように僕の《アサルト・ゼータ》をしばらく眺めてカタパルトに向い、ア

リーナに飛び出していった。

「頑張れよ」

「……うん。それじゃあ——」

《アサルト・ゼータ》の脚部をカタパルトに固定。ややひざを曲げる。

「ユウキ・キサラギ。《アサルト・ゼータ》行きますー！」

カタパルトシャフトが高速で滑り、アリーナに打ち出される。タイミングを合わせ

^{アサルト}
A デイフェンサーのスラスターを始動して飛び立つ。これが……生身で空を飛ぶ感じか。

「よつと」

前後左右と体を翻す。ISは宇宙空間を想定しているから地上でもPICが働いてるから無重力の中を動くのと同じか。宇宙育ちのせいか初めて動かした気がしないな。

「操作には慣れたかユウキ？」

「大丈夫です」

「ならしい」

僕はガトー先生と同じ高度で停止した。

「……………」

改めて相対するとわかるけど、プレッシャーがすごい。肌に刃物が突き刺さるような

感覚がする。初めて会った時もこれくらいの感覚だったけ？ いや少し違う。なんか……柔らかくなってるのかな。

「ではいくぞっ！」

「はいっ！」

ビーツ！

ブザーが鳴り響いた。《アサルト・ゼータ》の拡張領域からビームライフルを呼び出す。光の粒子が集まり形成していく。

「遅いぞっ！」

「え？」

ガトー先生が突っ込んでくる。その手にはブレードが握られている。ほぼ同時に展開したはずなのに、向こうのほうが早い!?

「はあああー！」

ま、まずい。A^{アサルト} デイフェンサーを始動。スラスターに火が入り最大出力でその場から後方に飛び退き、ブレードの一閃を寸前でかわす。

「……………つかはー！」

急加速に一瞬息が詰まる。身体にくるGが予想よりきつい。スラスターの出力を調整しないと無理な機動をすれば死ぬね。

「ほう。高速機動型のようだ。瞬間的な加速は瞬間加速イクニッション・ブースト並みとは恐れ入る」
 瞬間加速？

「なんですかそれ？」

「ISの技術のひとつだ。スラスタのエネルギーを再度取り込むことで、二回分のエネルギーを使い加速するものだ。直線的な軌道しかできないが、タイミングを見計らい相手との間合いを瞬間的に詰める——」

キユイイイードンツ！

ハウリングのような耳をつんざく音の後に爆音が響いた。同時にガトー先生の《打鉄》が広げた間合いを一瞬で詰めていた。

「こんな風にだっ！」

ブレードが横一文字に薙ぎ払われ左脇腹を捉えた。ボールがバットに打たれたように吹き飛び、次いで衝撃が体に走る。

「つうく……はあっ！」

胃液が逆流しそうになるのを堪えるながら体勢を直すが間を置かせない斬撃の雨が襲ってくる。

ガンツ！ ギンツ！ ガンツ！

力任せにブレードで殴られ反撃の隙を与えてくれない。ISにダメージはないがこ

れではなぶり殺しだ。

(このままじゃやられるっ！)

——ターゲット・ロックオン。マイクロ・ミサイル発射！

アサルト

A デイフェンサーのミサイルハッチがスライド。計12基のマイクロ・ミサイルを垂直発射した。

「なに?!」

マイクロ・ミサイルに気を取られた一瞬を見逃さず、飛び退く。

山なりの軌道を描き、ミサイルは一直線にターゲットへ降り注ぐ。

轟音と爆煙がガトー先生をのみ込んだ。

「やった?」

——全弾命中。敵ISは健在。

爆煙が切り裂かれ、ガトー先生が飛び出す。《打鉄》の両肩部のシールドが黒焦げ損傷している。

さすがに墜ちてはくれないか。

「油断したが、その程度ではなっ!」

パンツと瞬時^{イグニッションフット}加速で加速するが、僕はそれと同時にスラスタを噴かして突っ込む。

あの技術は直線移動でしかできない。なら通り道に――

「撃てば当たる！」

ビームライフルを放つ。相対距離を縮めたことで射距離も短くなる。ビームは《打鉄》に吸い込まれていく。

「っー！」

無理に体を捻りながらガトー先生は躲した。それも予想通りだ。銃口を線を描くように横に移動させ、回避予想ポイントに向け二発目を放つ。

「なんとっー！」

ビームは左肩を射抜き、体勢が揺らいだ。――少し遅かったか。ガトー先生をパスして振り返り距離を取る。

「近接戦はお断りですよガトー先生。僕は射撃戦が得意ですから」

向こうのＩＳはおそらく近接戦防御型だと推測される。兄さんとの時に射撃武装を使つてこないのは初手で無力だと思つたに違いない。いくら薄くなつているとはいえガンダニウム合金を穿つならビーム兵器または口径の大きな徹甲弾か無反動砲をぶつけるしかない。

近接戦でもそう。ガトー先生はブレードの打撃力で操縦者を疲弊させる戦術で来ている。

なら、僕が取る戦術はひとつだけ——長距離アウトレンジからの波状攻撃。

「確実にあなたを墜とします！」

再装填されたマイクロ・ミサイルを発射。ビームライフルで回避方向の制限と距離を詰めさせないように狙撃する。

「つくー！」

次々とマイクロ・ミサイルは着弾してシールドエネルギーを確実に減少させていく。しかし油断はできない。懐に入られたらその瞬間に負けが決まる。接近戦はできなくはないが、勝てる自身はない。得意な兄さんでさえ負かされたのに僕が勝てる道理は無。堅実にこの戦術で勝利しに行く。

アウトサイド

「ぬう……間合いを取られてはこっちらが不利か」

飛来するビームを躲しながらガトーは思案する。この時すでに《打鉄》のシールドエネルギーは100を切っていた。直線的なビームは避けられても誘導型のマイクロ・ミサイルは機動力の乏しい《打鉄》では全弾を回避することは不可能に近かった。

ガトーの技量であるからこそ最小限のダメージで済んでいた。しかし、それも長くは

続かない。次のマイクロ・ミサイルの一斉射を無傷で回避しない限りガトーの負けが決まってしまふ。これは実機試験だ。負けても戦績に載ることはない戦いだ、ガトーは決してあきらめてはいなかった。

（アサルトライフルを使い牽制しながら接近するか？ いや、あの強度ではおそらく効果は皆無。《打鉄》の機動力をフルに発揮したとて追いつけまい。瞬時^{イクシジョンブレイスト}加速を使ったとしてさつきほどと同じことになる……）

教師として生徒の問いにはわかりやすく答えることを目指した結果がこの窮地を招きえたことを悔やんでも仕方がないと潔く割り切る。逆にユウキの適応力の速さを感じていた。

しかし、このアナベル・ガトーが自ら敗北を受け入れることはない。それはIS操縦者としての、一人の武人としての誇りが許さなかった。そして何より——ガンダム相手に屈することはできない。

「これで終わりですガトー先生っ！」

《アサルト・ゼータ》からマイクロ・ミサイルが飛来する。躲そうと機動を取ればビームライフルの狙撃が回避機動の妨害か決めにくる。頭上と遠距離からの挟撃。ならばガトーの選択はひとつだけだった。

スラスター最大出力で《打鉄》が駆ける。マイクロ・ミサイルは山なりに下り、ガトー

に降り注ぐ。ここで瞬時^{イグニッション・ブースト}加速、マイクロ・ミサイル群をすり抜ける。だが、ユウキとの距離が縮まらない。《打鉄》の機動力、瞬時^{イグニッション・ブースト}加速の最大到達距離を踏まえた機動力で後退していく。マイクロ・ミサイルはさらに弧を描き旋回しながら後方から迫りくる。

「やはり……」

ユウキの狙撃は当てる目的でなく機動の妨害。避けれるギリギリを、機体速度が落ちるように狙ってくる。マイクロ・ミサイルで仕留めに来ている——ならばやれる。

左手にアサルトライフル——焔備を呼び出す。ユウキのビームライフルに狙い定め斉射した。機動中であつてもガトーの射撃は正確無比であつた。ユウキは身を引き左半身でライフルを庇いながら後退する。

「南無三つー」

正面の狙撃を止め、反転。寸前まで迫っていたマイクロ・ミサイル群に向けて焔備を掃射した。弾幕はひとつのマイクロ・ミサイルを穿ち、爆発。残りのマイクロ・ミサイルは巻き込まれ連鎖爆発していく。素早く体を捻り戻す。12基の爆発エネルギーが爆風となり背中に押し寄せた。——この瞬間をガトーは狙っていた。

《打鉄》のスラストに爆風のエネルギーを収縮——今までの中で一番大きな爆発的な音を上げ、《打鉄》が駆け抜ける。

「うおおおおおっ!!」

驚異的な加速に全身の筋肉が、骨が軋む。かかる負担は想像以上のものだ。しかし、その対価はある。他を寄せつかないほどの加速はユウキとの相対距離をその名の通り瞬時に消失させた。

「うそっ?!」

さすがのユウキも度肝を抜かれ、驚嘆の悲鳴を上げた。

射程内に捉えた。焰備を捨て、近接ブレード——葵を握りしめた。ガンダムタイプ特有のツインアイの内側で驚愕の顔をしているユウキをガトーは容易に想像できた。

「素晴らしいぞうううめええええええっ!!」

叫びとともに大上段に上げた葵を力の限り、振り下ろした。甲高い金属音がアリーナに響いた。葵は頭部に落とされ、細い刀身に亀裂が走り砕け散った。《アサルト・ゼータ》は無傷。しかし——

「……………あ……………っ……」

時が止まったように一瞬静止したユウキは後ろに倒れるようにして地上に墮ちた。地響きをあげ砂煙が包み込んだ。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

息を乱しながら大粒の汗が滲み出る。ガトーは砂煙の近くに降り立つ。《打鉄》が表

示したシールドエネルギーの残量——19。賭けだった。もしも、マイクロ・ミサイルの爆風で《打鉄》のシールドエネルギーが尽きていけば、焔備の斉射でユウキの狙撃が止まなければ、イグニッション・ブースト瞬時加速に体が耐えられなければ結果は変わっていた。

砂煙の中から倒れている《アサルト・ゼータ》が現れるが動く様子はない。

「勝った……………のだな……………」

アリーナに響くブザーを聞き、緊張の糸が切れたガトーは片膝をついた。ここまで無茶なことをしたのは第二次モンド・グロツゾ決勝以来であった。

ユウキに恨みはないが、前世に果たせなかつたガンダムとの結局を与えてくれた運命にガトーは静かに感謝した。

第十三話 試験三戦目 一夏VS麻耶？

ユウヤサイド

「大丈夫か？」

「うう……まだ頭がグワングワンしてるよ」

アリーナからガトーにピットへ運ばれたユウキはISを解除して更衣室のベンチに腰かけて項垂れている。頭に落とされたブレードの一撃は《アサルト・ゼータ》に傷はつけられなくとも操縦者の意識を刈り取る威力はあった。本当に恐ろしいものだよ。

「わたしも年甲斐なく熱くなっていたようだ。はははははっ！」

対照的にガトーの表情は清々しかった。ああ、悪いと思つてないなこれは。

「……………その顔、絶対に悪いって思つてないですよね？」

恨めしい眼差しでユウキはガトーを睨む。

「勝負ごとに関して手は一切抜かぬことが相手にとつての礼儀だ。その過程でケガがあることは必然、謝るようなことがあるかユウキ？」

「程度つてものがあるでしょう？ やりすぎなんですよ！ こっちはほんとに死ぬかと思つたんですからねっ！」

「なら安心しろ。ISはMSと違い絶対防御で守られている。場合によっては重度のケガをするが、起動中あの程度で死ぬことは皆無だ」

「それでもですよっ!」

ユウキはぎやあぎやあと喚くがガトーの言っていることもまた正論だ。

真剣勝負に手を抜かれては後々の遺恨を生むだけ、ISは安全面に関してはMSより優秀なのも確かだ。

「それまでにしろって。負けた俺らが何言ったって虚しいだけだぞ」

「むう……」

ムスツとするユウキ。

「わかってるけど愚痴ぐらいは言わせてよ。だいたい——」

「ユウキお姉ちゃんっ!!」

通路側の扉から顔を青くした一夏が飛び込んできた。ユウキを見るなり脱兎のごとく勢いで抱き着く。

「い、一夏ちゃんっ?! どうしたの?」

突然のことで俺たちは驚く。

一夏は顔をユウキの胸に押し付け小さく震えていた。

「……モニターに映る………ユウキお姉ちゃん………動かなくなっ………運ば

れて……………心配で……………怖くなって……………」

ポツリポツリと一夏は言う。模擬戦で気絶したユウキがよほど心配だったのか、涙声になっている。

「そっか。ごめんね心配かけて

ユウキは震える一夏を抱きしめ、優しく頭を撫でた。

「でも、僕はこの通り大丈夫だよ」

「……………うん」

顔を上げた一夏の目元の涙を服の袖で拭った。

「しかし、一人でよくこの場所が分かったな織斑」

「……………」

親の仇を見ような冷たい眼差しで一夏はガトーを見据えた。

「こつちだと思つたから……………それだけ」

「……………むう」

そう言い顔を逸らした。思つたからつて。あとガトー、そつけないからつてむつとするな。

「クロエはどうしたんだ？ お前の傍を離れ——」

「居ますか？」

見ると隣にクロエが居た。

うおっ?! 居たのかよ!

「いつからそこに居た?」

「一夏様が入ってすぐに」

「え?」

気付かなかった。気配の欠片もなかったぞ。

「……影が薄いからでしょうか」

クロエは小さく呟いた。表情の機微が乏しいがはどこか悲しげに見えた。

「いや、すまん」

この世界に来てから俺は謝ってばかりだとしみじみ思う。なんでだろうな。

「いいんです」

クロエもいつも通りに答えた。よくわからん。

「ああ……やつと……追い付いたっ!」

息を乱しながら入ってきた山田先生は足が纏れて前に倒れ込むのを寸前で受け止める。

「大丈夫ですか?」

「は、はいっ! ごめんなさいっ!」

顔を覗くと頬を赤くしながらそそくさと離れた。今更だけど、山田先生もけっこう大きいな。何処とは言わないが。

「……………」

「……………」

「……………」

ガトー以外の視線が冷たい。なぜだ？

「あ、ガトー先生お疲れ様でした」

「うむ。では山田先生あとは頼みます」

「はいっ！ 任せてください！」

どこか嬉しそうに山田先生はにかんだ。

一夏サイド

管制室のモニターに倒れて動かなくなったユウキお姉ちゃんを見て、わたしは頭が真っ白になって、いつの間にか飛び出していた。更衣室の位置はわからなかったけど、あの日なにかに導かれるように森の中を進んだ時と同じに、気が付けばわたしはたどりに着いていた。ユウキお姉ちゃんが大丈夫だったことにホッとして涙を流した。ガトー先生にどうやってこれたかを訊かれたときは、思ったからと答えた。けど自分でもよく

わかってはいない。

「では実機試験を始めます。二人とも準備はいいですか？」

「……はい」

「問題ありません」

「それじゃあ……織斑さんとクロニクルさんどちらが先に行いますか？」

ユウヤさんとユウキお姉ちゃんみたいにくまく動かすことなんて、正直できる自信はない。けど……

「わたしから行きます」

わたしは一步前に出た。

「わかりました。織斑さんはISを起動してください」

「はいー」

気合を入れるように強く答え、《白零姫》を呼び出す。

左手のガントレットが光輝き、手足に純白の装甲が纏っていく。背中に翼を模したような大型ウイングスラストターが展開。一角獣のような角があるティアラ型のハイパーセンサーが頭に装着された。

「大丈夫なですか一夏様？」

「うん、大丈夫。ありがとう」

心配そうなクロエさんにしつかりと頷く。《白零姫》に乗ったのは二回目だけど不思議と大丈夫な感じがする。この気持ちならやれる。

「ちよつと待っていてくださいね。わたしもI Sに乗り込みますから」

そう言い山田先生も展開待機状態のI Sに乗り込むんでいく。《白零姫》は山田先生が乗り込んだI Sを《ラファール・リヴアイヴ》と識別したデータを表示した。

「それじゃあ、アリーナに入ります。慌てずにゆつくりと自分のペースで来てくださいね」

《ラファール・リヴアイヴを》カタパルトに乗せ、山田先生は飛び立った。

「すう………よし」

小さく息を吸い込んで、一歩ずつ前に進む。

戻ってきたカタパルトに《白零姫》の足を乗せる。意外と操作は簡単な。

「一夏様、お気をつけて」

「うん。いつてきますクロエさん——」

瞬間、高速で流れるカタパルトで体がのけぞりそうになり、打ち出されたらと思ったらそこはもうアリーナの中だった。

「……っ！」

体が重力に従って地面に落ちていくが《白零姫》のPICを起動しているからふわり

とした感じにゆっくりと降りれた。山田先生は降りたところから五メートル先に居た。

「織斑さん、大丈夫ですか?」

「……大丈夫です」

カタパルトの加速は驚いたけど、それ以外は問題なし。

……けど、正直不安。

あの日、束さんは《白零姫》ことを説明していたけど、嬉しくてほとんど頭に入っていない。

「武器はなにがあるの?」

「眩きじみた問いに《白零姫》は拡張領域内の装備一覧を表示した。

「……雪片」

一覧の中に知っている名のものにわたしは目を細めた。

——雪片。それは世界大会で千冬姉さんが使っていたISが振るった刀の銘。千冬姉さんはそれだけで世界大会二冠を成し遂げさせ、千冬姉さんを変えた物。それが雪片。

惨型と書いてあるからその発展型なんだと思う。

「雪片惨型——展開」

そう言うとう右手から光の粒子が溢れ、形を成していく。1・6メートルの片刃のブ

レードが右手の中に現れた。

「……………」

これで千冬姉さんは世界最強の地位と名誉を手にした。この刀にはそれだけの力がある。それでも代価もある。千冬姉さんが手にした代価——それが私だ。

管制室を見る。ISのハイパーセンサーを通しているから数百メートル離れたここからでも千冬姉さんの顔が見える。……………悲しい顔をしていた。

「準備はいいですか？ 不安でしたらもう少し——」

「大丈夫です。始めてください」

山田先生に視線を戻して雪片を構える。なんでそんな顔をするの？ まるで私がISを使うことが嫌なような。……………わからない。管制室で助言したとき、あんな態度だったから？

わからない。けど、いまは目の前のことに集中しよう。

ピーツ!!

「それでは……………行きますー!」

開始と同時に山田先生は勢いよく飛び出して、向かってくる。あまりにも一直線すぎるから横に飛び躲し、着地と同時に、地面を強く踏み込んで跳躍。振り返り様の山田先生に袈裟斬りをするが踏み込みが浅く避けられる。

「わ、わわわっ!」

「…………え?」

なぜか避けたはずの山田先生のほうが慌てていた。さっきまで落ち着いてとか、大丈夫とか言っていた人じゃないみたい。

でも、こつちにとつては好都合。

「他に使えるものは?」

問いに答え《白零姫》は使用可能な装備の一覧を表示。

多機能武装腕——麗月を解放。アンロック射撃モード、エネルギー充填チャージ——敵ISをロックオン

!

(こつち使うんだね)

左腕を山田先生に突き出す。表示された標準に合わせて高密度圧縮された蒼白のビームを放った。

「ふえええええええ?! なんですかそれえええええ?!」

叫びながらもビームを危なげなく回避する。

ドゴオオオオオオンツ!!

避けられたビームはアリーナのシールドを穿ち、観覧席を吹き飛ばして大穴を開けた。

「……………え」

山田先生が後ろに振り返って唾然。わたしも驚いて《白零姫》の左腕と穴が開いたシールドを交互に見た。

……………威力……………やばい。

『アリーナ防衛シールドが破損しました。ただちに模擬戦を終了してください。繰り返します——』

すぐさまアリーナに警告が鳴り響いた。

「織斑、何か言うことはないか？」

「……………すみません……………でした」

ピットに戻ってきたわたしを待ち構えていたのはガトー先生。客席に大穴を作ったわたしは頭を深く下げてる。鋭い眼差しと怒気を含んだ声音が丸めた背中に突き刺さる。怖くて顔を上げられない。

「そう怒るなガトー。一夏はISを初めて動かしたんだ。右往左往してしまっても……………仕方ないと思うのだが？」

助け舟を出すユウヤさん。

「アリーナの観客席を吹き飛ばしてもか？　今回は無人だからいいものを人が巻き込まれたとき、君は操縦は初めてだから仕方ないというのか？」

「……それはそうだが」

「で、でも今回はほら何もなかったんですし、僕がちゃんと出力の調整をしておきますから……ね、山田先生！」

「え、私ですか?!」

全員の視線が山田先生に殺到した。子犬みたいにぶるぶると震えている。

「そ、そうですね。織斑さんもまだ初めての操縦ですし……今回は嚴重注意でいいんじゃないかなと」

「……………はあ。わかりました、今回はそうしましょう。しかしっ
！」

ぎろりと睨まれ、心臓が破裂しそうになる。

「次、もしも同じようなことが起きればそれ相応の罰があることを覚えておけ、いいな織斑」

「……………はい」

「ならいい。山田先生とわたしは管制室に居る理事長と学園長、織斑先生に報告しにくいため解散だ」

「あのわたしはどうなるのでしょうか？」

「クロニクルに関しては日を改める……か、アリーナを変えるしかない。確認をするがおそらくは午後になる」

「わかりました」

ガトー先生と山田先生はピットを後にした。

「ごめんね一夏ちゃん。僕もまさかあそこまで威力があるなんて思わなかったよ。これじゃ整備士失格だね」

ユウキお姉ちゃんは謝った。ISのデータの管理をしていたのだから《白零姫》の搭載されてた物はおそらく知っていたんだ。でも使ったのは私なんだから本当に謝らなければいけないの私の方だ。

「……………ごめんなさい」

「しょうがないさ。よく分からなくて使えばこうなるつと覚えておけばいいんだ。次から気を付けければな」

ユウヤさんに頭を撫でられる。

ユウキお姉ちゃんと違って優しくて安心して安心するようで、頼りになるような力強い感じがした。